

古史傳

自第一段
至第三段

一

部史歷
第一函
共三册
號

和書門類			
四	二	五	一
一	三	一	八
四	一	一	冊架函號類

內閣文庫			
四	二	五	一
一	三	一	八
四	一	一	冊架函號類

內閣文庫			
番號	和 42518		
冊數	40 (4)		
函號	140	185	



古天

神

皇

神

皇

古天地未生時於高天原有

神焉御名天坐御中主神次高

皇產靈神
亦名高木
皇產靈神

皇



古史傳一出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

カニヨクカニツキヒトニキトイフキ
神代上一出卷

古天地未生出時於高天原有

神焉御名天出御中主神次高

皇產靈神
マタノミナハタカギノカニマタマラスコモ
亦名高木神亦云薦

枕高皇產靈神此者

○古史傳一

○一



蒼々と志て。上下四方都て圓形。圍成せるが如く見ゆ
る處の疆界を阿米と云ふ。唯大虚空の事とのみ思ハ
むを違ふり。此を末に委く説
明をを見てはと神世よ。天日也。阿米と云ふ。此は
知るべし。別を次注ふを見るべし。地をば。此大
即天日をいふ。あふ天と。天日と。虚空との差
地を云ふ。万葉十一。大土採雖盡云くと有む。国土を凡
て。大土を云ふ。と聞えて古言ふ。ちて都知とは。師云も
を泥土此堅はゆて。国土を成れはと云ふ。名ある故ふ。
小くも大ふも言ふ。小くは。一撮の土をも云ひ。ま
廣く海子對へる陸地をも云を。天子對て天地と云を
死は。れを大死ふして海を母包と云。孫の氏くをも。地祇

部子收られとる。是地。ちて正しく阿米都知と云。言れ。
る。海をも包む。故あり。ちて正しく阿米都知と云。言れ。
物不見えと。依む。万葉二十。防人歌ふ。阿米都之乃。以都
例乃可美乎云。はと阿米都之乃。可美爾奴佐於支云。
岡部翁云。古、東人。ち。ち。か。し。ら。あ。る。心。を。添。て。言。傳。へ。と
る。言。の。ま。ふ。う。ち。云。死。れ。ぬ。京。の。人。と。り。も。却。り。て。古。言
此。據。と。い。へ。き。物。ぞ。と。云。ま。き。都。は。と。五。了。阿。米。幣。由。迦。婆。
知。を。東。言。ふ。都。之。と。云。る。あり。は。と。五。了。阿。米。幣。由。迦。婆。
奈。何。麻。爾。麻。爾。都。智。奈。良。婆。大。王。伊。麻。周。お。ど。何。也。今。云。お
久。尔。と。い。ひ。阿。米。都。知。と。い。ふ。差。を。具。ふ。○未。生。之。時。を。伊
論。れ。と。古。事。記。傳。了。就。て。見。る。べ。し。○未。生。之。時。を。伊
麻。陀。那。良。邪。理。斯。登。伎。と。訓。は。し。口。訣。了。伊。万。太。者。將。來。之
る。べ。上。了。注。了。天。日。は。と。大。地。も。未。生。了。了。時。と。云。れ
也。○高。天。原。は。名。義。師。説。ふ。高。と。是。も。天。を。云。稱。ふ。て。あ

おふ高^{コウ}光^{カウ}意^イふ云^{クモ}とは。少^シう異^イふ也^ヤ。然^シれど此^{コノ}高^{コウ}日^{ニチ}枕^{マク}
詞^{コト}了^ル高光^{カウカウ}と云^{クモ}も天^{アメ}照^{テラ}也^ヤ同意^{ドウイ}高^{コウ}御^ミ座^ザも天^{アメ}の御^ミ座^ザと云^{クモ}也^ヤ
とふて。是^{コノ}等^{トウ}比^ヒ高^{コウ}も同^{ドウ}じ。又^{マタ}高^{コウ}行^{コウ}也^ヤ。隼^{ハヤブサ}別^{ベツ}也^ヤ。高^{コウ}津^ツ宮^{ミヤ}段^{ダン}
虚^{ソラ}空^{カラ}を高^{コウ}と云^{クモ}牙^カる也^ヤ。此^{コノ}も高^{コウ}く行^{コウ}と云^{クモ}よ非^ヒ交^{コウ}抑^{ヨク}天^{アメ}
て云^{クモ}る也^ヤ。母^{ハハ}虚^{ソラ}空^{カラ}を天^{アメ}と通^{ツウ}をし云^{クモ}も常^{ジョウ}ふて天^{アメ}於^オ
そられども云^{クモ}也^ヤ。さま^{サマ}バ高^{コウ}也^ヤ。天^{アメ}と虚^{ソラ}空^{カラ}とを今^{イマ}世^セ小^コ
通^{ツウ}をしある名^ナあり。共^{トモ}よ高^{コウ}き方^{カタ}ふあま^{アマ}むあり。物^{モノ}の虚^{ソラ}空^{カラ}よ高^{コウ}く上^ウるを高^{コウ}
も天^{アメ}於^オ虚^{ソラ}空^{カラ}を然^{シカ}言^{イフ}也^ヤ。牙^カ上^ウる也^ヤ。云^{クモ}免^メり。但^シ此^{コノ}也^ヤ。
天^{アメ}下^{カミ}ふ何^{ナニ}ま神^{カミ}く云^{クモ}こを非^ヒざ依^ヨり知^チらば。此^{コノ}伊^イ勢^セ国^{クニ}
あど^{アト}も云^{クモ}也^ヤ。東^{ヒガシ}国^{クニ}原^{ハラ}とは。廣^{ヒロシ}く平^{ヒラ}られる處^{トコロ}を云^{クモ}ふ。海^{ウミ}原^{ハラ}
野^ノ原^{ハラ}。河^{カハ}原^{ハラ}。葦^{アシ}原^{ハラ}。れどの如^{ごと}し。万^{マン}葉^{エフ}歌^カふ也^ヤ。国^{クニ}原^{ハラ}とも何^{ナニ}也^ヤ。加^カ
ふても云^{クモ}ことあり。原^{ハラ}とは。廣^{ヒロシ}く平^{ヒラ}られる處^{トコロ}を云^{クモ}ふ。海^{ウミ}原^{ハラ}。

かま^{カマ}ば。天^{アメ}をも天^{アメ}原^{ハラ}とは云^{クモ}也^ヤ。之^{コノ}原^{ハラ}と云^{クモ}例^{レイ}も海^{ウミ}之^ノ原^{ハラ}也^ヤ。
て其^{コノ}高^{コウ}てふ言^{コト}找^{ソク}添^{ソフ}て。高^{コウ}天^{アメ}原^{ハラ}とは。此^{コノ}国^{クニ}土^{ツチ}よ也^ヤ云^{クモ}也^ヤ。
れ也^ヤ。凡^{ソレ}て天^{アメ}を高^{コウ}とも云^{クモ}也^ヤ。云^{クモ}く也^ヤ有^{アル}也^ヤ。此^{コノ}説^{セツ}の如^{ごと}し。但^シ
此^{コノ}師^シ説^{セツ}也^ヤ。凡^{ソレ}て高^{コウ}天^{アメ}原^{ハラ}と云^{クモ}は。天^{アメ}於^オ御^ミ国^{クニ}を云^{クモ}ことある由^{よし}。
委^イく論^{ロン}ひ定^{テイ}め。其^{コノ}名^ナ義^ギをも解^{トク}ま^スる也^ヤ。其^{コノ}説^{セツ}合^{ガフ}さ依^ヨり也^ヤ。あ^アは
天^{アメ}日^ヒいまだ成^{ナリ}らざる時^{トキ}あれど。其^{コノ}説^{セツ}合^{ガフ}さ依^ヨり也^ヤ。あ^アは
とある也^ヤ。第^{ダイ}廿^ニ九^ク段^{ダン}天^{アメ}照^{テラ}大^{ダイ}御^ミ神^{カミ}。高^{コウ}天^{アメ}原^{ハラ}を依^ヨり給^{タマ}ふ
此^{コノ}名^ナ義^ギも係^{ケル}る事^{コト}をのみ引^{ヒキ}とる也^ヤ。只^シそ^ノちてあ^アは。天^{アメ}日^ヒい
はど成^{ナリ}らばる時^{トキ}ある也^ヤ。高^{コウ}天^{アメ}原^{ハラ}と云^{クモ}いふ也^ヤ。是^{コノ}も師^シ説^{セツ}也^ヤ。
此^{コノ}三^{サン}柱^{チウ}神^{カミ}とち^トは。天^{アメ}地^チと也^ヤ。先^{サキ}立^{タチ}て成^{ナリ}坐^マちま
は。虚^{ソラ}空^{カラ}中^{ナカ}ふぞ成^{ナリ}坐^マちま^ス。於^オ高^{コウ}天^{アメ}原^{ハラ}と云^{クモ}也^ヤ。後^{ノチ}まで
後^{ノチ}ふ天^{アメ}地^チ成^{ナリ}ては。其^{コノ}成^{ナリ}坐^マち^ス處^{トコロ}。高^{コウ}天^{アメ}原^{ハラ}ふ也^ヤ。後^{ノチ}まで

其高天原モトふ坐カまは神カミあるが故ユあり。元モト來キ高天原タカノノホありて。其コノ處トコロに成坐ナリ坐カと云ハふ。非ヒ交マ。云ハこれあり。然シカれど此ノ説ヲを信ズぐとし。信ズは未タだ此ノ高天原タカノノホとあるを。後ノ天ノ於ケ御国ミクニの生ナれる處トコロを云ハふは有リ法ハららニ必ズあリは。大虚オホソラの上方カミツベ謂ハふは北極キョクの上ノ空カラ。紫微垣シヱヱの内ノを云ハふ依ルべし。其ノ如何イカニとあれど。後ノ成ルれを以テて。其ノ無キ以前イマふ及ビ布シて云ハふ也ナも。れキよを何ニら祈ヒど。此ノ決キて然ルる法ハららニ交マ。此ノ紫微宮シヱヱの邊ヘも。高處タカの極キョクふて。天ノの眞區マコトとる處トコロあれど。此ノ高天原タカノノホと云ハふ處トコロあり。殊ニは最初ハジメの三柱ミツタテ大神オホカミハ天ノ於ケ日ノの處トコロに云ハふを合セ考ヘ。扱ツさ死シふ古史コシ成文セイブンを撰ヒ法ハる時トキふ。此ノ處トコロを於ケて悟ヒ法ハし。

天御虚空アメノソラと書カキと依ル中ナカに惡ソコかり死シ故カ古事記コトワザに依ルて。今イマ此ノ如ク記シ改メ死シ於ケ。其ノ天ノ之ノ御中ミナカ主ノ神ノの御在ミ所トコロハ次ノ北ノ辰ノをハ此ノと指シて云ハふ也ナ。天ノ御虚空ミナカをハ此ノ處トコロにハ有リ神カミ。神ノ代ノ紀ノ一ノ書ノに。天地アメノチ混マ成ル之時トキ始メ有リ神カミ人ヒト焉ナリ。次ノ有リ神カミ語ノを採ヒて。加微麻斯伎カミマシキと訓ヒ法ハし。信ズは此ノ神カミ何處ナニに坐カせハ。云ハふは此ノ謂ハふは北辰ホクセン星ノ也ナリ。中ナカに御坐ミカせハ。此ノ北辰ホクセンは天地アメノチより先ニ立テ在リ。々々むと。漢籍カンシヤクにも依ルりて。己ミ詳シ考ヘ得ルと。説ハあり。されど此ノ云ハふ煩シは。故コトに記シさ交マ。其ノ赤縣セキケン太古コノコト傳ハの上ノ皇ノ太ノ一ノ紀ノを云ハふ。直ニち北辰ホクセンのハ中ナカを云ハふも有リむ。猶モト第ニ廿ニ九ノ段ノの傳ハ云ハふを合セ考ヘふべし。信ズは此ノ御中ミナカ主ノ大神オホカミに坐カせハ。申マひまでも無キ事コトあり。何ノ時トキよシ成坐ナリ於ケと云ハふ。

也。傳へおけまむ知法うら矣。天地よ正も先おれむ唯始
心得法し。是よ正以前ふ。神を在の事おられむ其始を
て傳ふべき由れき理あり。北辰の始也。准て悟べし
然るを前ふ。古事記に成神とありを以て成坐神と
と文あるは。後子熟く思へむ。悪かりし故に改坐神と
凡て迦微と云物のおとは。ま於師説ふ。古に御典等お見
えある。天地に諸神とちを始也。其を祀まむ社を坐
に御靈をも申し。はと人を更ふも云矣。鳥獸木草は多く
い。海山おぞ。其餘何ふまれ。尋常れらば。優たる徳の何正
て。可畏死物を迦微と云れ也。優たるとは等きこと。善
優たるは。此み字云。非。或。悪きもの。奇しき物。ちて人此中
おども。世了卓きて可畏きを。神と云あり。
此神は。ま於挂はくも畏死天皇は。御く世くみお神お坐

おを申しも更お正。其は遠於神とも申して。凡人とは遙
お遠く。尊く。可畏く坐まはぐ故お正。かく多次くおも。神
ることあり。はと天下お。うけむりてこそ有ら。祿一。國一
里一家の内お。たきても。分くお神ある人あるぞうし。
はと虎をも狼残も神と云。依こと。書紀万葉おどお見え。
まお桃子。小意。富加牟都美命と云。名を賜ひ。御頸玉を。御
倉板舉神と申せし類。まお磐根木株。艸葉の。くく言語し
類おども皆神お正。はと海山れどを神と云。るおとも多
し。其を其御靈の神を云。非。或。て。直よ其海をも山を抑
も。ちして云り。此等もいと可畏き物あるが故あり。抑
迦微也。如此く種くふて。貴死も何正。賤きも何正。強きも
有正。弱死も何正。善きも何正。悪きも有りて。心も行も。其

様く小随ひて。せ正しく。ふし有れむ。貴き賤きも段く
の中子も徳をくく。凡人も負るさ。牙あ。彼、狐あ
ど怪き。わざを為。おと。はい。う。賢く。巧。ある。人も。う。けて
及ぶ。べき。非。妄。実。神。あ。ま。ど。も。常。小。狗。れ。ど。ふ。あ。ら。制
せら。ゆ。く。ば。う。正。の。微。き。獸。ある。を。や。され。然。る。類。の。い
と賤し。死。神。れ。う。牙。を。此。み。見。て。い。う。ある。神。と。い。牙。ど。も
理。を。以。て。向。ふ。う。を。可。畏。き。お。と。無。し。と。思。ふ。を。高。き。卑。れ
威。力。の。い。と。く。差。ある。こ。大。か。あ。一。む。き。ふ。定。然。て。は。論。の
と。残。辨。牙。げ。る。非。説。あ。正。然。る。を。世。人。の。當。然。き。理。と。云。こ。せ
あ。死。物。小。れ。む。有。り。依。を。以。て。神。れ。う。牙。を。議。る。を。太。じ。き
非。お。と。あり。悪。く。邪。ある。神。を。何。事。も。理。小。達。へ。る。あ。じ。き
此。み。多。く。ま。と。善。神。れ。ら。む。か。ら。う。其。不。ど。み。從。ひ。て。は。正
あ。き。理。の。は。く。了。の。み。も。え。あ。飛。ぬ。事。も。有。げ。く。事。も。ふ。れ
て。怒。正。坐。る。時。あ。ど。は。荒。び。給。ふ。事。何。り。惡。支。神。も。悦。む。べ
心。お。ご。み。て。物。幸。を。ふ。る。こと。絶。て。無。き。ふ。し。も。非。ざ。依。べ
し。ま。と。人。を。え。知。ら。れ。ど。も。其。所。為。の。さ。し。當。り。て。は。惡。し
ぞ。思。を。依。く。事。も。実。よ。を。吉。く。善。し。と。思。を。當。り。て。は。惡。し
は。凶。き。理。の。あ。る。お。ど。も。有。べ。し。凡。て。人。れ。智。を。限。有。り。て。

は。こ。の。理。を。え。ら。然。物。あ。れ。む。か。ふ。か。く。ふ。は。して。善
神。れ。う。牙。ハ。漫。ふ。測。り。論。ふ。べ。き。物。了。何。ら。に。は。して。善
死。も。惡。き。も。いと。尊。く。卓。と。る。神。あ。ち。の。御。う。牙。小。至。正。て
は。以。せ。母。く。妙。小。靈。く。奇。あ。く。れ。む。坐。は。せ。む。更。し。人。の
小。死。智。以。て。其。理。あ。ど。千。重。れ。一。重。も。測。正。知。ら。る。は。き。お
ぢ。ふ。非。交。あ。ぐ。其。尊。死。を。尊。み。可。畏。死。を。畏。み。て。ぞ。有。べ。死。
今。云。荒。木。田。久。老。の。万。葉。を。注。せ。る。ふ。此。師。説。ま。據。て。迦。微
と。を。畏。み。恐。怖。意。み。て。万。葉。小。大。王。の。御。命。う。し。お。と
多。く。見。え。と。る。は。御。國。の。古。意。了。て。心。れ。そ。あ。ひ。天。皇。を。畏
み。奉。る。は。綾。小。奇。あ。き。御。稜。威。の。お。を。し。坐。が。故。あ。正。千。早
振。神。ち。ふ。發。語。も。あ。ぐ。神。靈。れ。意。了。あ。ぐ。け。と。云。る。を。理。免。き。て。聞。也
神。を。加。し。お。む。意。不。あ。ぐ。け。と。云。る。を。理。免。き。て。聞。也
れ。ど。カ。三。は。カ。レ。コ。け。て。迦。微。小。神。字。を。當。と。依。よ。く。當。れ
三。此。畧。語。ふ。を。非。交。け。て。迦。微。小。神。字。を。當。と。依。よ。く。當。れ
正。但。し。迦。微。と。云。は。體。言。あ。れ。む。直。了。其。物。を。指。て。云。の。み

尔。其。事。其。德。あ。ど。を。指。し。て。云。こ。ぞ。は。無。き。を。漢。国。ふ。
て。神。と。は。物。を。け。し。て。云。此。み。あ。ら。ば。其。事。其。德。あ。ど。を。指。
る。も。云。て。體。ふ。も。用。ふ。も。用。ひ。と。也。あ。と。牙。む。彼。國。書。ふ。神。道。を。云。る。は。測。の。と。く。
聖。し。き。道。と。云。こ。と。了。て。其。道。の。さ。ま。を。指。て。神。と。云。る。
了。て。道。の。外。ふ。神。を。云。物。あ。る。ふ。を。非。矣。然。る。を。皇。國。了。て。
迦。微。之。道。を。云。牙。む。神。の。始。給。ひ。行。と。る。ふ。道。と。云。こ。ぞ。ふ。
こ。そ。何。れ。其。道。の。さ。ま。を。迦。微。と。云。こ。と。を。あ。し。も。し。迦。微。
れ。る。道。と。い。は。ば。漢。國。此。意。の。如。く。れ。る。考。れ。れ。ど。其。も。あ。
本。直。し。其。道。を。さ。し。て。云。了。こ。そ。あ。れ。其。さ。は。を。云。了。い。れ。
ら。ば。書。紀。ふ。神。劍。神。龜。あ。ど。何。る。神。字。も。漢。文。の。意。ふ。其。德。
字。け。し。て。云。了。了。て。何。や。あ。き。劍。あ。や。し。き。龜。と。云。こ。と。あ。
れ。む。迦。微。と。は。訓。べ。あ。ら。ば。も。し。カ。三。タ。チ。カ。三。カ。メ。れ。ぞ。
訓。と。き。む。あ。ら。ば。劍。を。け。し。龜。を。さ。し。て。迦。微。と。名。く。る。ふ。
あ。る。也。凡。て。皇。國。言。此。意。と。漢。字。の。義。と。全。く。は。合。が。あ。る。也。も。
多加。味。を。傍。ふ。合。げ。る。處。あ。味。字。も。大。方。此。合。了。味。を。取。て

當。る。物。あ。れ。む。そ。此。合。さ。味。所。の。何。る。あ。と。城。と。く。心。得。
分。ば。き。あ。也。あ。と。漢。籍。ふ。陰。陽。不。測。之。謂。神。を。有。は。氣。之。伸。者。為。神。屈。者。為。鬼。あ。と。云。る。類。を。以。て。迦。微。を。
思。ふ。考。也。有。り。あ。の。師。説。い。と。委。死。考。ふ。は。有。ま。と。此。を。迦。
微。て。ふ。物。既。ふ。有。て。其。後。の。德。用。を。説。示。さ。ま。あ。る。ふ。て。其。
名。義。ま。と。あ。の。稱。へ。初。と。味。所。以。字。む。何。ぞ。も。記。さ。れ。也。既。ふ。
師。説。ふ。迦。微。と。申。は。名。義。を。未。思。得。也。舊。く。説。る。あ。と。い。も。
皆。當。ら。ば。也。云。れ。と。り。彼。カ。三。は。鏡。の。中。畧。あ。ど。云。ふ。類。を。
い。ふ。よ。も。此。を。千。言。万。語。の。有。ら。中。ふ。も。最。第。一。ふ。辨。へ。知。
ら。ば。有。考。ら。ら。ざ。る。事。あ。る。故。也。今。此。は。説。辨。了。む。と。ん。
其。は。は。お。神。と。云。ふ。言。義。を。御。紀。の。卷。首。ふ。古。天。地。未。剖。陰。
陽。不。分。渾。沌。如。雞。子。溟。滓。而。含。牙。云。と。有。る。牙。あ。れ。あ。也。

但し此を古く、阿斯加備とも訓する由あれど、其を誤る
正、葦牙とハ固より異る也。まよ伎邪志と訓するは允當
らさて加備の加は、彼の意ふて、物を其を指て云ふこと
備を靈妙ある物を云語也。前ふを牙萌の約まはる
非ハ加くて加備を。加微と同く。加夫也。加牟とも通ず
也。其を神祖を。加夫呂とも。加牟呂とも。賀味留岐賀味留
弥とも云ふて知べし。まよ酒を。カミ。カム。カモス。あど
云は。全く同言同義ふて、物を蒸成意あり。然れむまよ
クミ。クム。クヒとも通ひて、君も同言ありむ。約也。は
キとも云ひて、物を凝凝意母去もれ也。まよ道奥の末
蝦夷阿りの固ふて。今も神まよ。固司を。カム。イ。或を
カモエ也。云とぞ。此は。カミ。頭大く。下細き形字云ひて。頭槌
ミ。てふ言也。延する也。頭大く。下細き形字云ひて。頭槌
之。劔。鏑。矢。あぞ。此加夫も。本と也。同言を依る。株蕪冠被み
リルは。助辞ス。凡て。此加微てふ言の活用也。多く限りあ
れ。活用あり。

死こと。是ふ勝る詞なく。自おのら神の御功德也。廣く大
あ依ふも叶ひて。いせく。靈異く奇妙ある事ふこそ。れ
次く。よ云を。扱去は。三柱大神也。産靈ふ因て。始て。大空
合せ考べし。扱去は。三柱大神也。産靈ふ因て。始て。大空
ふ生出給する。一物の中ふ含まて。奇靈ある物の極あ
依る。終ふ清易り。自然騰て。天御国と成也。天御柱とも
成ある事ハ。下よ委く云ふ。如し。第二段の傳。斯て。此
加備て。ふ物の形状を考ぬる。ふ。決て。男易也。形あるは
く所思と也。上云へる。頭槌。劔。鏑。矢。其を。まよ。菌の類也。
即加備ある。此を。草木也。精氣の。地氣。ふ。和合して。生依
物ある。ふ。自然。ふ。同形。あ。依。も。い。せ。奇。し。まよ。凡て。物。よ。矇
の。出。と。る。と。い。と。

細毛の生とる如くあるが、謂ゆる顕微鏡もて見る時を
し。○因了云示字を神字の本義と所思ゆるを以て悟るべ
し。示まと示とも書るを思ふる。若くは加備のもえ
上り。天と成まる形。状は象れる字。非じ。但し此を
神字の本義と思ふ由を。神事。事。字。の。益。示。从
ふを以て知。又此字。注。神事也。とも云ひ。天無象。ち
見。吉凶。所以示人也。とも云。移り。云。状。あ。て。
て天神の賜する天瓊戈は。彼牙。因て生ぬ。其有状も
牙。れ。せ。依。物。あ。て。赤。縣。太。古。傳。ハ。玄。牡。と。稱。る。こ。と
即神あると論あ。は。御年。神の男莖形。字。作て。祭
ら。免。給。牙。依。も。神の形代。ある。は。く。思。え。ま。又。皇。産。靈。大
神の御靈代。は。必。此。形。を。作。り。て。祭。て。と。り。し。事。と。思。え
依。其。印。度。ふ。て。古。く。大。梵。自。在。天。王。と。稱。せ。る。は。我。が。皇
産靈。大神の事と聞ゆる。其。靈。代。を。男。易。女。舍。此。石。形

あ。て。せ。彼。因。み。云。ひ。傳。牙。抑。加。の。一。物。含。は。て。し。加。備。を。
と。る。を。も。思。ひ。合。さ。べ。し。抑。加。の。一。物。此。生。出。て。雞。子。の。如。し。
物の成形始。依。と。有。る。は。其。混。沌。と。る。大。凡。を。云。牙。の。
あ。て。其。中。子。含。ま。て。し。物。を。其。形。状。さ。あ。り。あ。て。け。む。故。ふ。
別。多。加。備。と。ハ。稱。ひ。お。ら。む。あ。り。ふ。此。を。含。免。る。物。を。大。
凡。女。舍。の。形。あ。り。し。も。取。と。名。お。け。難。き。相。れ。る。故。り。あ。り。
大。ら。う。一。物。と。云。ひ。そ。れ。交。合。の。状。あ。り。し。を。バ。言。ひ。難
し。と。ぞ。傳。牙。其。物。於。此。不。拔。出。て。萌。騰。て。天。津。日。と。成。て。天
あり。り。り。此。御。柱。と。も。成。て。宇。麻。志。阿。志。訶。備。比。古。遲。神。天。之。底。立。神
も。其。因。て。生。成。坐。て。い。と。も。奇。靈。あ。る。物。あ。る。が。
其。物。實。ハ。牙。れ。て。し。故。ふ。天。日。を。直。加。備。と。も。云。ひ。ら。む。
か。き。御。紀。子。生。一。物。狀。如。葦。牙。便。化。為。神。云。く。せ。ハ。云。傳。牙
と。云。々。む。但。し。此。を。混。ら。ハ。し。き。傳。子。を。あ。れ。ど。神。と。て。天
日。我。云。り。と。見。れ。ば。違。を。あ。ま。と。諸。越。ふ。て。も。古。は。神。を。天
と。相。通。牙。る。を。思。合。さ。べ。し。あ。の。こ。と。委。く。次。段。よ。云。べ。し。

然れを加備とは。世小生出と依物の元始にて。いやく
奇靈ある物あるの。是よ延て。都て奇靈ある物を云ふ
稱とも爲れ依事を辨へ曉る。或人問、加備字形成せ
心得、さるを此よ以前、三柱の天神おはし坐し、其
御名をも稱す申せる上、御身体あると論ふ。然れ
を牙字始とは云、さうらず、此理を如何答らば、さるは
三柱、天神の御身体あるハ論ひ、如何答らば、さるは
まし扱れを、誰う其始を知らむ。斯て彼一物は、三柱神の
始、免て生出給す。其語りて、即その成立をも、直ち看
行し給ひ、其趣字語り、給へる依れ、然れ
む三柱の御名とも、御み、御名告給す。然れ
まじく、然れ、負せ奉る神世と、御名も、造化の首、御
功徳を稱へて、三柱神の御名も、神を稱へ申せ、
依り、然れ、三柱神の御名も、神を稱へ申せ、
加備と加微を、同言ふて、其いやく奇靈ある妙なる依事を稱

よ及びて。造化の事、小與て給ふ加微等ハ申はも更お
り。凡て世小奇しく、靈しく、功徳ある依者を加微と云ひ、其
をやがて神と書す。神を加微と云ふ、當とる漢字ある、又
後ふは、凡人、此中、小も、卓絶とる人、残加微と稱ひ。是より
守、長官、おど、皆、カミ、云、尊みて、云、おど、ま、頂上を
カミ、云、同、意、あり、ま、髪、を、カミ、云、頭上、生る
と、り、云、れ、る、べし、岡部、翁、云、後、世、人、を、神、と、上、と、を、分、て、用
ふる、ら、ら、文、字、お、み、目、お、れ、て、言、の、意、を、忘、れ、て、字、お、於
きて、別、お、り、の、み、思、ひ、附、會、此、理、窟、を、以、て、解、む、と、依
を、怯、お、し、皇、朝、よ、一、言、を、轉、し、て、何、ま、の、事、お、云、お、り、
一、言、を、一、事、と、云、
る、を、漢、風、お、す、
万、物、の、中、小、も、卓、越、ある、物、を、ば、宏、く、稱
す、
て、
神、と、云、ふ、事、と、ぞ、成、れ、け、る、
此、お、云、る、言、ど、も、神
を、引、お、記、せ、れ、お、立、返、り、見、て、知、は、し、
師、説、
○御名者、ま、於、名

と云言此意を生成熟あど此本語ふて。形也あども活用
きては那流那良年とも云れるが。神まと人を更ふて。万
物をも某と號くる事は其物加ふらば成就する上ふて。
負ひ味ふやふて。神まと人物ふ限らぬ。万の中おも人は。
其行状此善惡功德此大小ふ依て自然ふ他よて稱へ云
とまろ即名あゆ。其は景行天皇の大御語よ。大倭国者以
行事負名国也。まハ年中行事秘抄を始め其外の書ふと
宣給ふるを以て知る法し。ふ不次く小神とち此御名義
て辨ふ。○天之御中主神御名義天は阿米と訓法し。阿米
を蒼くと志て。上方よて始て。四方ふ廣く遠く見遙

うさ依く疆界を云ふ。此こと既上ふ注に。まと天日を
事あり。そと已されふ。聖の眞柱を著せる頃は未委くさ
思得ざりし故。其説盡さぬ。かま今詳う辨ふべし。さ
て此疆界ある其内を與と云ふ。竹の節と節との間を。即
世間とも云ふ。漢籍ふ宇宙と云ふ。れあり。されど天皇
申は。まの世と云ひ。世間と云ふは。多くハ人ふ屬て。稱
ふ言あり。はるは君が世人の世。我が世あど云う。如し。扱
ま。凡て障る物れく。廣く遠く疆界も何も無き處を虚
空と云ふ。ま。此與の中も。い。廣く遠く大ふして。限
無ぐ如く唯空く見ゆる故。ふこまを。曾良と云ふ。此の
阿米と。曾良と。與と。各々異ある事。ふ有れぬ。其差別の
さ。さ。り。小見分ち難き。が。故。り。又相通ハして。阿麻都曾良
とも。かくて其蒼くと見ゆるは。何故と云ふ。此をか此

三柱の大神也。天地及び万物を主宰^{ソウサド}と給ふ。其御氣勢^{ミイキ}の。普^{ツキ}く虚空^{クウコウ}に充滿^{ミツク}あるが。青くは見ゆ^{ミユ}依^ヨる也。あきぐ如く
ふれども其氣厚く充ち重なる 扱^{ツク}ふの大虚^{ダイコ}は外方^{ソトベ}に涯^{カキ}
故に色濃く見ゆるあり也 也あるまやを。何哉^{ナニカ}以て知ると云む。此^コを見極^{ミキ}むるま
と能^ナをばまども。下^{シタ}ふ。第六十 神速^{カハヤ}須佐之男^{スサノヲ}命^{ミコト}此^コ天壁^{アメノキタ}立
五段 極^{キハミ}巡坐^{メグルマ}而云^{ト云フ}くや有るを考^{カウ}合^{カフ}せて云へる也。猶次 小^コ云
抑^{ソク}阿米^{アマ}てふ名^ナ義^ギハ罔^{アミ}ふて。阿美^{アマ}阿麻^{アマ}阿牟^{アマ}阿麻牟^{アマ}とも活
用^{ヨウ}く言^{コト}ふ也。此を別著せる古史本辞經と云書ふ 今^{イマ}見
放^{サツ}るところ。委く記せれむ 斯^{カク}の如^{カク}く四方^{シヨウ}に向^{ムク}伏^{フス}し。廣^{ヒロク}く遠^{トホク}く壁^{カベ}立^{タチ}と
依^ヨ状^{サマ}に見^ミえて。漢籍 小^コ天^{テン}圓^{エン}如^{カク}倚^{ヨリ}蓋^{カシ}と云^{コト}ひま^マと為^{ナリ}蓋^{カシ}象^{ゾウ}天^{テン}
おども云ひはと宇書ふ 口^{クハ}は莫^{ムク}狄^{テク}切^{セツ}音^{オン}覓^ミ

覆^{フク}也。从^レ一^ニ下^ニ垂^ニ也。此^コ頂上^{テイジョウ}の處^{トコロ}に依^ヨる也。北辰^{ホクセン}ふて。此^コよ^ヨ四
方^{シヨウ}に下垂^{シタリタレ}と依^ヨる。下^{シタ}北方^{ホクポウ}に大地^{ダイチ}に障^{サカ}りて見^ミえはまど。大
凡^{オホキカタチ}圓形^{エンケイ}なる事^{コト}と思^{オモ}はる。其を大地を休息おく旋回する物
る事あき 然^{シカ}れど。上^{ウヘ}下^{シタ}左右^{シヨウ}にあ^アら^ラる如^{カク}く依^ヨるまど。然^{シカ}らば。北
辰^{ホクセン}の處^{トコロ}は上^{ウヘ}ふて。左^{ヒダリ}を東^{ヒガシ}。右^{ミダリ}を西^{ニシ}に也。此北辰の處天に本
界此大罔 天^{テン}網^{コウ}雖^シ疎^ソ終^{シユ}不^ズ漏^ル也。おども云り 天^{テン}網^{コウ}恢^カく疎^ソ而不^ズ失^ス也。も
圍繞て圓形 圓^{エン}形^{ケイ}なる時^{トキ}に。其^{カク}と指^{サシ}る名^ナを依^ヨるまど。然^{シカ}らば。北
ぐ如くあれども 主^{ヌシ}とは其^{カク}本^{ホン}網^{コウ}なる處^{トコロ}を云^{コト}べ也。云ま
くも更 是^{コト}を此^コ阿^{アマ}米^メてふ物^{モノ}は。何^{ナニ}時^{トキ}成^{ナリ}とるからむと云^{コト}ふ。
傳^{デン}れけまぞ。知^チ法^{ホウ}うらま^マは。強^{ヒキ}て按^{オモ}ふ。其^{カク}本^{ホン}網^{コウ}と依^ヨ
處^{トコロ}に。北辰^{ホクセン}と共^{トモ}に生^{ナリ}るむ。總^{ソウ}て一^{イツ}物^{モノ}の生^{ナリ}出^デある頃^{キリ}に。

成整へ依物あるは。此を譬へば、彼牙此萌騰れるハ、火
烟の普く四方に充てり。然るが如く、阿米の成き依を、其
れるが如く、みや有るむ。御中は、師云、真中と云むが如し。
凡て真と御とは、本通ふ辭を依を、や、後ふは分て、御を
尊む方。御字を書も、此意れ也。但し此字を漢國より多は、王
御う牙に限りて云々。此方にて美と云は、天皇の
小も何よも云辭あり。真を美稱ると、甚しく云と、全死
や、不用ふ。されど古、此言の遺れ依を、れ不通はして、真
熊野とも、三熊野とも云ふ類多く。ま、真と云は、きを、御
路おど。御中も此類なり。天此みあらば、國之御中、里之御
中おぞも、万葉歌にあり。俗言ふ、中といふも、真中お
て、一と撰、祢、ま、と、一ツと、は、と、毛、那、加、を、云、ふ、も、真、中、の
おむるを、俗言の常なり。

轉れるもて、天武紀に、天中央とあり。此字を以て、此御
主は大人と同言して、能宇斯此切はまるなり。宇斯を主
ととも見え、その書紀に、繼躰天皇の大御父、彦主人、王、ま
と、続、日本紀に、阿倍朝臣御主人、おど、是あり、去れら、今ハ
訓多誤。故古、小宇斯を、必、某、之、宇斯と、之、を、加、牙、ある、ふ、云
ひ、奴斯を、某主と直に連て、之を、加、牙、然、ふ、云、也。飽、咋、之、
宇斯能神、大背飯之三熊之大人、大國主神、大物主神、事代
主神、經津主神、おど、此、如、し。ま、と、書、紀、に、齋、主、神、は、と、丹、波、
美知能宇斯王を、書紀に、道主王とあり。是等を以て、知
は、し。奴斯も、之を、添て、某之主といふ、又、あ、主と、ば、う
勝宝元年の哥に、あ、奴、之、と、あり、其、頃、と、也、ぞ、さ、る、言、も
あり、む、ま、と、主、字、を、宇、斯、と、あ、て、て、お、し、て、奴、斯、と、當、と、る

し。ま。と。唐書。宋史。あ。ど。ふ。皇。國。の。事。戎。其。御。功。徳。此。廣。く。大。記。せ。る。初。主。号。天。御。中。主。と。も。有。也。阿。那。か。あ。お。あ。依。こ。や。稱。子。申。出。は。き。詞。も。れ。し。と。知。べ。し。阿。那。か。あ。お。阿。那。多。布。登。ル。本。諸。越。小。傳。ハ。也。と。る。此。大。神。の。古。説。也。赤。縣。大。古。傳。の。上。皇。太。一。紀。と。云。ふ。を。見。て。知。る。○。次。師。云。都。藝。ハ。都。具。と。い。ふ。用。語。の。體。語。小。れ。を。る。れ。也。凡。て。言。ふ。躰。用。の。別。あり。躰。と。を。動。う。終。を。云。用。と。を。活。く。を。云。そ。の。躰。語。も。本。々。也。躰。あ。る。と。用。の。躰。小。あ。れ。る。と。阿。也。い。と。上。代。り。を。用。語。多。く。て。躰。語。少。く。あ。り。也。し。を。世。く。り。人。の。言。語。の。多。く。あ。り。も。自。由。く。あ。り。也。用。語。の。分。ま。て。躰。語。も。あ。れ。都。具。也。都。豆。久。と。も。や。同。言。あ。れ。ば。都。る。が。い。と。多。死。れ。也。藝。も。都。豆。伎。と。云。ふ。同。じ。今。云。次。続。あ。ど。ギ。グ。と。濁。ま。ど。も。也。次。ハ。彼。も。此。の。お。く。意。続。ハ。彼。と。ち。て。其。小。縱。横。の。別。あ。此。と。お。く。意。あ。る。を。も。て。辨。ふ。は。し。し。て。其。小。縱。横。の。別。あ。也。縦。を。假。令。ば。父。此。後。を。子。此。嗣。と。く。ひ。あ。也。横。を。兄。此。次。

ふ。弟。の。生。は。し。類。あ。也。是。と。下。ふ。次。と。阿。る。は。皆。あ。の。横。此。意。あ。也。され。む。今。此。あ。依。を。始。め。て。下。ふ。次。妹。伊。邪。那。美。神。と。あ。る。次。ま。て。皆。同。時。ふ。し。て。指。續。き。次。第。に。成。坐。依。あ。也。兄。弟。の。次。序。此。如。し。て。父。子。の。次。第。の。如。く。前。神。の。御。世。過。ひ。ま。が。ふ。る。と。と。勿。き。○。高。皇。産。靈。神。本。小。皇。産。靈。此。云。美。武。須。毘。と。也。阿。也。古。語。拾。遺。も。古。語。多。賀。美。武。須。比。新。撰。姓。氏。録。も。高。弥。牟。須。比。命。あ。ど。あ。る。是。訓。の。證。あ。り。れ。本。此。神。の。御。名。を。書。等。も。高。御。産。巢。日。神。高。御。魂。命。高。魂。命。あ。ど。も。書。さ。り。皆。御。紀。の。訓。注。古。語。拾。遺。あ。ど。も。依。て。訓。べ。し。タ。カ。ニ。ス。ビ。あ。ど。唱。ふ。る。ハ。音。便。小。類。御。名。義。高。也。高。天。原。此。高。と。同。く。れ。と。る。後。世。の。訛。あ。也。御。功。徳。を。稱。へ。て。申。せ。る。あ。る。は。し。別。御。名。を。も。高。木。神。と。申。せ。也。姓。氏。録。も。天。高。御。魂。乃。命。三。代。実。録。も。天。高。結。神。あ。ど。天。て。ふ。言。を。冠。ら。せ。て。も。申。せ。り。此。も。美。称。れ。也。

の状あるはれど。薦枕高しと云も此意あるはれし。と何
也。薦のこと。まよ此を枕と云る由也。ちて神の御名ふも。
第九十一段の傳り。委く注ふべし。ちて神の御名ふも。
發語を冠とは眞髮振櫛稻田比賣。薦枕志都沼值命あ
ど。猶多加也。こを薦枕して。静み寢る由をもて云うけ。○
神皇產靈神。御名比義。まが神皇は加年美と訓べし。高皇
を竝びとる稱辭也。產靈の義上ふ同じ。此神の御名を。
日。神。神產日。神。神魂命。ふと書るは。カミムスビを訓み。神
御魂命とも書るも。此を同じ。カムミムスビと訓はれし。
○神產巢日御祖命ハ。迦微年須毘能美於夜能命。と訓は
し。大土之御祖命。大山祇之御祖神。ちて御祖としも申出
は。此神は女神ふて。諸の神等此本於御母の神ふ坐せば

あ也。母を於夜と云こと。まよ於夜も祖字。○神魂大刀自
神。神魂を。迦微年須毘能美於夜能命。師説の如く。
も神美と美の重れ依故り。多く約絶て申し習する依
べ。大は稱辭。刀自を岡部翁の説に如く。允恭天皇紀。戸
母此云。觀自とあ也。て。戸は家。自ハ主比義也。神祇官比
宮主を。美夜自と唱ふる類也。後の物語書よ。い子ある
云ふ。即ち。ちて御紀。戸母と書依を。古へ戸内の事を。母あ
依人の。老を扱るは。て執扱まむ。母を家主ある故也。教
ある。上総。因人大高秀明云く。我郷ありふも。今も家内
よて。專と事執る婦人を。家主と云ふ。母あれむ。母を云ひ
云り。古意の存れる也。ちて此神は。女神ふて。產靈比内

事を掌給へば。大刀自神と申はる。云々下よ委く。此
て師説ふ。世間ふ有と。何る事。此天地を始て。万此物
類も事業も。悉く皆此の二柱此産霊大御神の産霊。ふ資
て成出る。毛のふ。跡を以て。一於二於云は。ま於伊邪
那岐伊邪那美神。此国土万物をも神等をも生成給へる。
其初。天神の詔命。よ由れる。其天神と申。此見え
る。神さち。あり。は。天照大御神の天。石屋。刺隠坐し
時。御孫命。此天降坐。む。と。依て。此。固。平。於。給。ひ。し。神
を遣。以。時。も。其。事。を。行。ひ。給。ひ。ま。此。固。を。造。固。給。ひ。し。事
少。毘古那神。も。此。神の御子。う。て。その。固。造。固。め。給。ひ。し。事
を。や。ぐ。て。産。霊。大。御。神。此。命。ふ。依。れ。り。大。の。是。を。以。て。
世。は。諸。の。物。類。も。事。業。も。成。る。は。み。あ。此。二。柱。神。の。産。霊。の
御。徳。あ。る。と。云。凡。て。世。間。は。何。る。事。此。趣。を。神。代。ふ。有。し
考。へ。知。る。法。し。跡。を。以。て。考。子。知。へ。交。れ。古。と。今。ふ。至。依。ま。て。世。中。此

善悪き移すもて来し趣あどを驗むる。ふ。み。あ。神。代。の。趣
ふ。違。へ。る。と。あ。し。今。も。く。さ。地。万。代。ま。て。も。思。ひ。を。加。す
於。法。し。今。云。信。よ。此。師。説。の。如。く。神。世。は。有。し。事。の。跡。を。と
知。ら。れ。ざ。る。は。探。秘。学。び。て。む。世。間。ふ。有。る。事。物。此。本。此。因。此
因。縁。を。ば。探。秘。む。も。の。は。無。き。い。う。れ。ま。む。世。人。此。さ。る。神。世。の
外。固。籍。と。も。依。て。事。物。世。間。の。理。を。知。む。と。爲。や。ら。む。
是。ぞ。信。り。か。の。木。子。縁。て。魚。を。求。む。類。あ。る。法。く。ま。よ。喬
木。を。下。り。て。幽。谷。ふ。己。が。心。と。没。ど。と。く。も。見。あ。さ。れ。て。最
も。怯。く。憐。し。思。は。れ。ど。妖。神。せ。も。ふ。耳。塞。ぐ。れ。あ。る。人。々
の。心。を。い。と。も。便。あ。く。ま。よ。此。神。の。兒。千。五。百。座。何。す。於。と
悲。し。き。物。り。ぞ。有。る。ま。よ。此。神。の。兒。千。五。百。座。何。す。於。と
何。る。千。五。百。は。あ。る。數。の。限。す。れ。く。多。死。を。云。例。あ。ま。有。
也。依。神。あ。ち。を。皆。此。神。此。御。子。あ。す。と。云。む。違。は。交。神。も
人。も。み。あ。此。神。の。産。霊。と。生。出。ま。ば。あ。す。拾。遺。集。歌。ふ。君

已、抑、うく二柱はしはして、一柱の如く、一柱うと思、牙、二柱
ふして、其差の髻まげ鬚すげしきと、いと淡き所以あると、そ
有、ほきと云、ま、其事、此、顯あらをれて、物、小見えと、依、蹟あとを以て
二、於、三、於、云、は、天、照、大、御、神、の、天、石、窟、小、幽、居、坐、る、時、は
皇、美、麻、命、の、天、降、坐、む、と、は、る、時、その御天降の時、あ
も、高、皇、産、靈、神、事、執、給、へ、り、是、ら、外、事、と、云、ほ、き、事、ど、も、れ
已、は、と、大、名、持、神、の、焼、石、小、焼、著、れ、て、死、給、予、る、時、小、蚶、貝
比、賣、と、蛤、貝、比、賣、を、降、し、て、活、さ、し、免、給、へ、依、ま、と、少、毘
古、那、神、の、海、と、已、依、來、坐、る、時、小、大、名、持、神、と、兄、弟、と、あ、已
て、因、造、固、免、よ、と、詔、命、給、予、る、れ、ど、は、内、事、を、云、ほ、き、事、ど
も、れ、る、を、神、皇、産、靈、神、も、此、し、給、ひ、て、其、御、名、の、出、と、依、よ。

神、産、巢、日、御、祖、命、と、何、已、御、祖、命、と、ハ、多、く、母、を、云、例、お、れ
む、女、神、ふ、て、内、事、我、掌、賜、ふ、こ、を、疑、お、し、神、産、巢、日、神、と、あ
る、初、發、の、處、を、
今、一、所、あ、る、の、み、ろ、て、餘、お、を、大、う、と、神、産、巢、日、御、祖、命、と
何、る、を、大、名、持、神、を、活、し、給、へ、る、處、り、此、み、御、祖、と、云、さ、る
と、大、名、持、神、此、御、祖、命、と、混、は、し、れ、れ、お、る、べ、し、斯、て、高
皇、産、靈、神、を、御、祖、と、云、る、こ、と、の、無、ハ、さ、ら、お、も、云、を、已、命
と、云、る、こ、と、も、一、所、猶、言、は、ぶ、神、名、式、小、出、雲、因、出、雲、郡、小、
と、よ、有、お、せ、お、し、
神、魂、意、富、刀、自、神、社、と、云、あ、已、お、れ、よ、依、て、上、小、刀、自、と、は、
此、御、名、を、奉、と、り、
上、小、云、如、く、女、小、い、ふ、稱、お、れ、む、此、も、一、の、證、と、は、べ、し、此、を、
神、魂、命、の、大、刀、自、と、云、ふ、櫛、八、玉、神、の、禱、白、せ、る、言、小、神、産、
義、小、見、む、を、非、お、せ、ぞ、
巢、日、御、祖、命、此、天、之、新、巢、此、凝、烟、乃、八、拳、垂、ま、で、燒、擧、を、何
る、も、大、刀、自、神、ふ、て、御、厨、の、内、事、小、預、う、已、給、へ、む、れ、已、此、事、

之。第百廿五段。ちて此二柱は男女大神也。産靈の御徳也
を見て知べし。ちて此二柱は男女大神也。産靈の御徳也
開て也。諸の物類も事業も生成也。神あちも生坐る也と
此由也云はく。少毘古那神を古事記了は神産巢日命の
御子とちて也。御紀ふは高皇産靈尊也。兒とちて也。古語拾遺も同
大。三輪神社記よも古事記と同傳を載して。召久延彦問時答曰。此者高皇産靈尊之子。少彦名神故遣使白於天神。干時高皇産靈神聞之。而云くといひて。是より下也。御紀と同じさまの傳を記せり。はく豊秋津比賣命を古事記まも御紀也。正書ふ。高皇産靈神也。子とちて也。一書ふ。神皇産靈神の兒と云る傳あ也。はく姓氏録ふ。久米直高御魂命八世孫。味耳命之後也。と云ひ。はく久米直神魂命八世孫。味日命之後也。とちて也。を思ふ也。

志。味耳。味日同人あり。師を耳日のうち何れぞ一也。誤写あるべし。と云れ。ちて也。耳を日を二つ重複するが。轉れるよて。同語ある也。天忍穗耳。此も諸の神あち。二柱の産靈也。御間ふ生坐るが故也。かく二方も傳と依れ也。
本朝事始よ。加奈止美命と云を。高皇産靈尊と神皇産靈之子也。と云へる事も。ちて也。由ちる傳あり。 儲まも御紀ふ。高皇産靈神の御言ふ。吾所産兒。凡有千五百座と詔へ也。と有ふ。出雲風土記よ。神魂命也。御子と云ふ。依れ。多く見されども。高御魂命也。御子と云ふ。ちて也。一柱と有ふこと也。凡て出雲風土記よは。神魂命といふ御名大名持命の宮造也。とを命せ給へる事も。御紀了。高皇産靈尊とあるを。其のちて風土記了。ハ神魂命の御量。といへり。其を彼記の傳くも。多。此も神あち。二柱神也。御子も。ちて云へれば也。

聞ふ生坐れど。神皇產靈命はその御母も當て坐はる故
ろ。御子をば專と。此神も係て。語て傳へば故ぞかし。され
氏録をばし免書等も。或ハ高御魂命の後といひ。或は神
魂命の後と云ふ。拘をらば。多ク皇產靈神の御末と隔
おく心得て有べき物ぞ。まゝ或ハ天御中主神也御末を
云ふ。おとも彼此あるハ。猶その本祖を云ふ。其末を
產靈神も係る。是れを無れ。是まゝ拘を依べき事。何
らば。凡て是らの事どもを。熟辨へざらむ。は物の出自
よ。いぶらまき事。其は實も養育給ふ事。何とは。此神也
此み多からまし。御業も正し。おと。後よ何おし御母神さちの。御子を育し
立給へば。依趣も。思合せて曉るべし。後の餘母神さち也。御
大名牟遲神の御母。刺國若比賣。味鋤高彦根命の御母。多
紀理毘賣命。佐太大神の御母。支佐貝比賣命。春山之霞壯
夫の御祖也。其子を見立と。儲まゝ高皇產靈神也。表も立
る事おどを考へ見法し。

坐て。外事を掌とるひ。神皇產靈命は裡も立坐て。内事を
掌とるふ趣も。依も據て思ふは。貞觀儀式立皇后儀也。宣
詞も。食國天下。政波獨知。倍伎物爾波不有。必母斯理倍乃
政有倍之。とて皇后を定免て。關中此政を成給ふこと。古
も正行ひ來ま。依事也。見えとる。其本は產靈大御神
のおし始免傳へ坐る道も。れむ有る。依。されどこそ。伊邪
美命偶も。まして大事成也。大國主神も。須世理毘賣命偶も。
して。大造之績も。おし給へり。まゝ天忍穗耳命も。豐秋津
比賣命の女。王依毘賣命偶も。述く藝命生坐るも。り次
次も。其御嫡后をば。いと重き物も。撰び給へり。其也神武
天皇。卷も。委く注ふを見。まゝ是也。及て。凡人の上
を思ふ。夫も。外事を掌り。婦も。内事をい。そ。み。て。兒を
育。は。を。始。免。家。内。の。事。も。專。と。行。ひ。て。戸。主。と。さ。り。稱。ふ
こと也。此謂も。因こ。せ。お。れ。む。上。件。の。お。や。も。を。思。ひ。通。

志て此意を子成念 ちて皇産霊大神此諸神を生給予依
るまじた物あり。 唯その男女此産霊の互ふ芽し合ふ。妙小奇志き御徳
の間よ。産成給へる。て夫婦の道小資ことふは非。更
夫婦の道也。伊邪那岐伊邪 是ぞ産霊此大御徳も有る
那美命よりぞ始まりなる。 依。夫婦此道よ由らでむ。子を生得ざる。凡人の上。神等の
より疑ひ思むは。産霊の徳を知。ざ依も此ぞ。神等の
みあら。諸の物類は更なり。天地成さず小鎔造とるへ
依産霊此趣も。是小準へて想像奉る。はく。天地を鎔造給
るて知ら。 まと生とし生依物ども。人を更よも云。其神
魂性情靈智も。悉く産霊神の賦物ある由を母辨ふ。はく。
漢土の古説。天よ主宰とる神ありて。謂也依造化の原
を司り。物類も事業も。悉く其神霊よ資て成り。人此生質

よ。至善をしき靈性ある。おとも。其神の賦る由 ちて新撰
を云。は。此大神の古傳の遺れるあり。 字鏡。小祀。以。純。祀。司。命。也。宇。牟。須。比。麻。豆。利。と。何。也。
以。豚。祀。司。命。と。見。え。と。り。以。純。祀。と。云。は。諸。越。ふ。て。祭。る
此文を採れるあり。依べし。 趣。あ。れ。む。此。間。ふ。も。其。祭。法。を。用。あ。り。し。や。用。ひ。ざ。り。と。志。や。
其。は。知。ら。れ。ぬ。母。但。し。牛。を。殺。し。て。漢。神。を。祭。れ。る。と。知。し
む。も。知。れ。ぬ。司。命。神。を。産。巢。日。神。ふ。當。て。其。祭。を。爲。お。る。と。と
は。疑。ふ。し。の。お。や。未。見。當。ら。ぬ。 ち。ち。司。命。神。の。事。は。抱。朴
子を始也。諸越の古書。上帝を云と見え。其説よ。人隱
れる。司命神。それ。犯せる罪の軽重。よ。随ひ。大。ある。ハ。三。百
日の壽を奪ひ。小。依。を。三。日。此。壽を奪ふ。お。ど。れ。不。異。説
も。多。う。れ。ど。此。を。漢。土。の。古。説。り。て。中。ふ。を。信。ら。る。 是。と
事。ど。も。あ。る。故。り。已。別。よ。委。く。論。ひ。記。せ。る。物。あ。り。 是。と

上帝は天帝也。ともあてて。御紀ふも。早く天皇祖神天孫不當
られぬまは也。く。鹿略カコソクふ思ひ奉るはきよ非交桓武。天皇
紀よむ。皇天上帝とも。天帝とも見え。文徳天皇紀よむ。皇
天とあり。此亦う皇典ミコトども。数見え。古語拾遺コゴふも。皇天
をも。皇天二祖とも申せり。其餘古語コゴ。斯て司命神の古也。猶
書ふ出とるを。計ふる違あらば。熟考コトするよ。宇年須比麻豆利ウシムスヒマヅリと有ふ依て。一已多ては。皇産
靈大神とも聞ゆまど。此を伊邪那岐大神イセナキふを非ざ依り。
皇産靈大神ミコトと。伊邪那岐大神イセナキとの事コトを互タガヒに混れとるを少からば。然るを。上帝まも天帝
とも稱ナヅケはる。伊邪那岐大神イセナキあるべく聞え。司命と云ふを
母。彼大神の。一日ふ千五百産屋ウツヤ立てむ。と詔給ミコトする趣オモふ
思合され。後ふ神祇官カミヤふ齋イハヒき祀マツルて給ふ。八神ヤシラの中ナカれる。玉

積産日ツクハスヒ。生産日シノハスヒ。足産日タラハスヒ。三神ミカミを。必司命カナメの神カミあらむと所思オボユ
れむ也ナリ。此コトを猶皇典ミコトハ更マシあり。其亦モト古書コトをも。普ツラく考
末マシある。文部フナブが祓ハラヘ刀ヤを上ノボる詞コト中ナカふ。皇天上帝ミコト。司命カナメを
どの古コトと有アて。祝詞イハヒ考コトふ注ツケされとて。合アせ見ミべし。○神
魯岐命ルキノミコト。神魯美命ルミノミコト。古を此コトの二柱ニハしら。大御神オホミカミの御稱ミナと云イハす。所
謂イハレとけり記ツケせるは。古語拾遺コゴふ。高皇産靈神タカミムスヒノカミ。是皇親神ミコト。留伎命ルキノミコト。神
皇産靈神ミコト。是皇親神ミコト。留弥命ルミノミコト。と何ナニるル據ツケれ也ナリ。名義神ナミカミハ加牟カムを訓ツケ
はし。加美カミと云イハす。加牟カムを唱ナゲふるは語コトの上ノふ在アて直ナふ
下シ。語コトふ續ツグく故ユ也ナリ。其コトは神伊邪那岐命イセナキノミコト。神速須佐之男命ニギハヤヒノミコト。
まも神避サリカミ神議カミれどノ如カし。間マよてふをハ。字ナリあれど。正ただし
は也ナリ。其コト神カミの名ナ。神カミを生ナ。然シカるルふ仁明天皇紀ニギハヤヒノミコトの長歌ナガウタよ。賀カ
むあどの類タガヒみあ同じ。

とるを ちて此加牟呂と稱する言此義を。縣居大人は神
らむ。 漏伎を。神須倍良袁岐美。神漏美を。神須倍良米岐美也
と云はま。師を加牟呂は神生祖也。上下の阿と夜とを
呂と生祖とは人ふはま物よまれ。生出る始の御祖ある
由也。云れ多也。此説いおまも理を叶ひて通也まぞ
己が思ふ處を然らば上よ云如く。加微てふ語は活
用也。加牟呂とは云る也。然るは大人とちいはま。加
微てふ語の本義を思ひ得られぬ故也。其説甚く迂遠
し。其を加微と云語も。やめて御祖と依意は籠也ままハ。
殊も生祖もぞ附て云法ま非矣。況て呂は多添れる

詞ある也。古語を成とけ言少よ。分也。死やうも解べ
其意を。いうやうも叫ぶ法也。然てを却て。古意
よ疎く思を依れぬれり。さて今禿子や云ふ。童女の髪
いと短く。搔あてよる姿を云ひ。中よも切禿子と云を。髪
を短く切。そろよて。冠せ居状も見ゆる。其やめて加備
の形よ似よる故也。同くカム口とは云ふる法也。是も一
於此證あり。又若くハ。今のカム口ちふ童女の姿の直ち
も御祖大神の御有様よ。似よる。加くて此神魯岐神
も亦知べららば。此を猶よく考べし。加くて此神魯岐神
魯美と申は御稱は。高皇產靈神皇產靈命を申せるの始
りて。常陸風土記に。諸祖天神云賀味留岐賀味留彌也。あ
依如く。凡ての天皇祖神とちは更也。御祖あらぬ神等
をも尊みまハ加く稱せ也。その神賀詞よ。高天能神王。高
御魂。神魂命とまお云て。下文
祭詞。大嘗祭詞。鎮魂祭詞。鎮火祭詞。れど。祈年祭詞。六月月次
祭詞。神魯岐神魯美命と。何れハ更あり。祈年祭詞。六月月次

命とあるも、高皇產靈、神皇產靈、
命を申せるまゝと論ひあきま。大殿祭詞。大祓詞。遷却崇
神祭詞。あやまた。皇產靈、大御神と。天照大御神とを申せ
るもて知法し。然れど本は二柱、產靈神を申せる御稱を。
大御神も申はる末あるまを、別ふ其大御前ふばりて
白は祝詞よ。皇吾睦神漏伎神漏彌命登。とある登てふ辭
よて知らぬ。大御神を女神ふませぬ。神漏伎とハ申ぐと
る様おれぬ。神漏伎神漏美との稱稱して。其を神祇官は
登てふ辞りて。其意を知らせとる文あり。八柱神の最初ふ。高御魂神魂命ハ。本より坐せど。餘ふ大
御膳都神。大宮能賣神。辭代主神。おとも坐せば。此祝詞よ
も。皇吾睦神漏伎命。神漏彌命登。稱辭竟奉。久と申せ。此

を受ばりて。皇祖神とは申がとた字。尊みて御祖よ準子
申せる故。添とる辭の登あゆを。思ひ合せて辨ふ法し。
岡部翁説ふ。神呂岐神呂美と申はる。高御魂神魂命と
始免て。伊邪那岐伊邪那美命。天照大御神まで。凡ての男
女。皇祖神を申はると云れしを。記傳よ。いかおとて。神
呂岐神呂美と申はる。何れも高皇產靈神と。天照大御
神と。二柱のみを指て申せるまゝと明し。と云れしハ。却り
ていふ。あやまた。其を神賀詞も。高天能神王。高御魂神魂
命とあやまた。まゝ古語拾遺よ。神呂美を。神皇產靈神よ
當とるも。心得慈事あり。と師の云れしも。委うらば。此を
いまお神皇產靈命の女神ある由を。考得られざりし
故の誤。ちて孝德天皇紀に詔ふ。我親神祖とあるは。仲哀
天皇を申し給へ。神賀詞よ。加夫呂伎熊野大神とあゆ
を。須佐之男命を申し。お大國主神の御祖おれぬ申せ
り。風土記よ。熊野加武呂命と申せ

るも仁明天皇紀の長歌ふ。賀美侶伎能。宿那毘古那也申
同じ。仁明天皇紀の長歌ふ。賀美侶伎能。宿那毘古那也申
せ。依を尊みてれ也。國土を作堅決とるひし祖まよ万葉
あどふ。皇祖神と何るをも。加牟漏岐と訓るは非あ也此
を須賣漏岐也訓べし。まよ三オヤガ三を訓むも悪うらび。侍て此言。師を
神と皇と替れるれみふて。同じ語あ也と云れとまよ。少
あく違ひ有べし。其を神祖ハ。此の二柱よ也始絶て。上代
の御祖等尔限也て申はを。皇祖を。皇美麻迹々藝命よ也
以來。近き御代くまよ我申は如く聞えとり。此詞の差別
む。我親神呂岐神呂美命とハ申せど。我親皇祖命と申
は。更まよ加牟呂岐加牟呂美と申せ也。須賣呂岐須賣
呂美と申さび。おれらを以て。異ある所以。字知べし。猶
須賣良岐てふ語のまよ。は。第百二十四段に注ふを見る

し。抑あの大神の。天地を銘造也。世界を開闢き給へるよ
就ては。外國くふ。其御傳あくは有法うらび。故普く其古
籍を考ふるよ。元始天王大元聖母と稱せる神何也。おれ
我が皇産靈大神あること。疑あく所思と也。されど此説
バ。あくよ記さ也。赤縣太古傳の。○三柱。師云。凡て古は神
盤古眞王紀と云字見て知べし。○三柱。師云。凡て古は神
をも人我も數子て也。幾柱と云也。神を本と也の事ふて。
皇子等あども然云へる。古事記ふ常れあやあり。や。後
和天皇紀の大命ふ。大政大臣一柱と詔ひ。空穗物語ふ。大
將ある人女等の事を云う。今一柱と云也。皆貴人の
う。牙のあとあり。書紀ふ。佛像一軀二軀あざあるをも。一
むし。屍二ばしらと訓り。落窪物語も。佛一をしら。佛二
は。あらあど何也。は。と文粹。前中書王の文ふ。白檀觀世音
一柱とあり。漢文ふを。於於らし。扱まよ。稱徳天皇紀の宣

命ふも二所の天皇と何也。中昔の歌物語ふどふも貴人をバみあ幾所と云り。今世の俗言も御一方御二方と云し。如ちてかく柱せしも云。所以也。詳あら祢ぞ。はた上代ふを宮造るまを云ふ。底津石根ふ宮柱太知と稱す。或は柱は高太くれども云ひ。大殿祭詞あどふも。柱の事を此み旨といひ。はと袁祁御子此室壽の御詞も母築立柱者。此家長御心之鎮也。と未だ詔ひ。其外神代の始ふ。伊邪那岐伊邪那美大神。天之御柱を行廻り坐しを始て。柱を云ふまと多く。後よは神宮ふ心御柱あど云こせも何也。斯て其柱を。何まと竝立る物あ依ぐ故り。もと皇子等れどの數多立竝坐を賀て。幾柱と譬へ申せしふや有む。

賀譬へし例は。万葉二ふ眞木柱太心者。と大ふして不動心をあど牙。二十ふ麻氣波之良寶米豆久禮留等乃能其等已麻勢波。刀自於米加波利勢受。れぞ何也。今云眞木柱譽て造れる殿の如く。在せはと數立竝ぶを木ふ譬へある母と。面變せせは。あり。は。同二十ふ麻都能氣乃。奈美多流美禮婆伊波妣等乃。和例乎美於久流等多く理之母已呂。と見え。松樹の並とるの我を見送るとて立と私記ふ。古以貴人喻於木。故爲一柱一木矣。以賤人喻於草。故謂青人草也。と云。此説はわろし。と何也。篤胤いま此説よ因也。れ布柱を稱ふ物也。其本義を考ふ。依ふは。於彼天神の賜へり。天瓊戈は皇祖

本よて靈異パヤレき徳ある物を廣く云ことふを有れど殊ふ
卓絶スグレたる神の御上ふ云ひては中々チカ希ウら志シからぢる
處あて且いふ尊ウツたも人の上ふは云ヒがぬし柱を神よ
限らば人ふも廣く云ふとふヒが上よ物の成整ナリトシひ鎮シま
てたるを云言よていふも然るシばき稱辭ナリある故ふ自
ぢうら柱とれみ云ふヒ成れシはるべし實シふも世よ
此柱コノばうト最トも太ヒく珍メと死物ハ有リことれしシ人ノ男ヲ
柱あるも御祖大神此大御身不効子る物よてかの成餘
之處在れをち是あるが万の事業これより起るいと
珍さき物れること今更ニも言ハべくも非ズ交ハりし但シしかく
云ハむ女神ヲ稱スむといふハ男女ノ相通スる然れど古子神を始
り稱スと成スる上ハ男ノ女ノ相ト通スる何レでふ事ハ有ラむ

免奉ウケて貴人ウキをも幾柱イクハシと計カふハちる事よて其を御壽ミコ
命ノを長く固カうれ御心ミコ意ノを太ヒく静シ々シく坐マさせと美祝ミイひ
て申せるハと更ニ論ハひあるハと無しシ此レよテ延キて普ク
子心の鎮まりをぞ爲せりなる。猶第五段ふ云を合せ考ふはし。○竝ニも師云美那ミナと訓は
し。字書ニ皆也トも偕也トも併也トも比也トも注ス○獨ニ
せり是を那良毘ニと訓ス古の語ニまニあラば

神成坐ガミナリ而シテとは次ニくハ女男相耦メカひて成坐ナリる神ノちを別
ちて唯一柱ヒトぢク成坐ナリるを申せテ竝ニ兄弟ケイテイ此レあリ死子シを獨
子と云フ如シ神ノ下ニ登リてふ辞ヲ添テけテ成字ナリ那理ナリ
を訓スふハぢテ師云那流ナリウと云言フ三ツの別ワけテ一ツふは無
し物ノの生ナるハ出スるハ残リ云フ人ノの産生ヲを云も是レあり神ニ成坐ナリと云フ

其意あす。二ッふを。此物のかはすて。彼物ふ變化を云ふ。豊
玉比賣命は産坐時。化八尋和邇あるひし類あす。三ッ
は作事の成終るを云。固難成とある成の類れり。此三ッの
りて。漢字を生成変化あど。異あまども。皇固は古書り
を訓の同じきをば通用ひて。字ふをけしも拘をらざる
あ多し。此の成坐も成字は意とは少々異ふ。○隠御身
して。書紀よ。所生神とある字のあろあり。○隠御身
矣とを。此三柱神あり。末は天之御中主神ハ。此後ふ其
御名の聞ゆるあどれく。其儘ふ。本は高天原ある。謂ゆる
北辰は中ふ。常志牙ふ隠す鎮座坐し。皇産靈大神二柱を。
此後ふ。天日御固も御坐し於れど。此あとを。石屋戸
皇美麻命の御天降ふ就ての事実を見て知べし。但し此
を其御本體ふは坐まはせ。必幸魂奇魂は神あるべし。其

由を其処くよ注。其本は御在所ハ。同じ北辰あるが故。
ふを見るべし。其御本體を。永く其所ふ神留坐し。遙々く遠く隔りて。此
固土よすは。終ふ其御形を見奉るあどれき故。かく語
す傳へる物あす。師云。御形体のふきを。如此言と心得
那神の事を産巢日神は。自我手候。久伎斯子也。と詔へる
を思ふべし。御身あて。御手を。有べきうを。此手候のこ
と。世人は心うハ如何思ふらむ。凡て神代の故事を。仮此
寓言の如く見るを。例の漢意は癖ふして。甚く古の傳へ
の意ふ。此次ふ。天日ふ成坐。依二柱。豫美都固ふ成坐る二
柱共ふ。御身を隠し給ひきとあるは。此大地球中ふ非ざ
依が故あす。況てあは。又遙ふ遠き北辰星よ。隠坐まは
り於てをや。されど此御固も。其御霊の留す坐あ。○上
と疑ふ。天御固は事を申はも更あす。

件三柱神を師説ふ。如何れる理ありて。何れ産靈ふとて成坐せし云ふと。其傳無れど知がとし。然るは甚も甚も奇しぬ靈志く妙あ依理ふとめてぞ成坐らむ。これど其はさらふ。心も詞も及ぶ。法きれら祢を固傳のあれぞ諾あゆける。凡て古の傳あれ事を己が心以て其理よていと安あはと此神とちは。天地とて先どちて成るにばれ。天地の成ること。此次りあまむ。此神とちれ坐おまは。成坐るを其より前あると知るべし。○今云これまでの説を信あ。虚空中ふぞ成坐しけむを。いま然るよとあ。も地も無き以前をい。ちくも。みか空志き大虚空あゆ文。○今云。大虚空のみふを非。北辰は天地とり先ふ在て。高天原と云。古事記ふ。於高天原成といひ。書紀一書する即其処あり。

ふも高天原所生神としも云。依を。後ふ天地成ては。其成坐せし處。高天原ふれて。後まで其高天原よ坐く。神とちれあぐ故あり。元來高天原ありて。其処を云れしは委しからば。然るは元來高天原と云處有て。其處よ成坐依あ。と上ふ云ふ如くあまは也。斯て後ふ天日成りて。其をも高天原と云を。はと後の事あるまを。下段の傳。ふ委あ。く注を見る法し。前ふを右此師説よ依て。於天御虚空既ふ上云。けて皇産靈大神を。如此いみじ。祀御徳あ依るが如し。故ふ。上代とて殊ふ重く崇祠らせ給ひて。まお神武天皇此御世ふ。大御身おうら顯齋して。高皇産靈神を祭せ給

神魂意保乃自神社。此御名也。此大神の女神ハコ坐カまシにシ神
魂伊豆乃賣神社。あの御名は心得コトぐとルれど伊豆乃清
御名ミナりやまと同郡トウ郡クニ神カミ魂ミタマはと清和天皇紀シヨウふと貞觀八年
三月二日。授大和国從五位下。神皇產靈神正五位下。とも
見えとす也。此目原坐高御魂神タカミ抑ノおし此大神の御社の官
ふ知られ給はざるを諸国シヨクふいと多タうタるタばく所思オモさる
ぐ。其は姑シヨウく置ケて。今世イマふ第六天神ロクノカミを云イて祭マツルれ依社ヨシヤ數カズ多
ありて。其祭神を面足惶根尊オモタルカシコネノミコトある由ユ云イふまと此コを附會ツケソヘ
の説セあれむ取トルふ足タらば。古コくハ面足惶根命オモタルカシコネノミコトを祭マツルれる
其由ミナも此神の出イデ實マコトを皇產靈大神ミコトを齋イハき奉マツルれる社ヤシれ依
とる下シふ注ツケべし。

はきふと己委オノき考カガへりて其ソノまはた印度の古傳コトワザふ。此大地
の頂上ウヘを放ハれて遙ハルカく高タカく處トコロふ。大梵天オホヒツチとも。大自在天オホニホリと
も稱ナヅケれる天界アマノありて。其ソノ主宰シヨウ此神コノカミを。大梵王オホヒツチノミコトとも。大自在
天王オホニホリノミコトとも申マツルて。此コノを天地世界アマノヨミを創造ソノゾクし。人種万物ヒトノミナモトを生成ソノゾク
せる祖神ソノカミあらはらゆゆ云イふはららぐ。此コノを我ワガが皇產靈大神ミコトの古事コト
也。彼因ソノ傳ツケハれるふて。いと正ただしき説セと聞キゆれむはれむ也。
まと佛書ブツショふ。二十八天ニハチハチノカミと云イふ。其ソノ第六天ロクノカミの主ヌシを。
右ミダの大梵王オホヒツチノミコトある由ユ牽ヒキ強カチせとる。佛祖ブツソ悉シツ多タが安誕ヤンタンあ
る。其佛説ソノブツセの世ヨ行ユクをレてよシ也。第六天ロクノカミあらど云イふとは
稱ナヅケふはる。後ノチ此物コノモノ知チらぬ神道カミミチ学者ガクら。其佛因ソノブツの稱ナヅケあるを
惡アクひと且カの天神カミ七代シチノノ地神チノカミ五代イノノあらど云イふ。妄説マダセれば也ナも
知チらぬ也ナと為ナるはふて。此コノ然シカまは第六天神ロクノカミを云イふ。強説カチセ
却サカりて太タじき非事ヒコト也ナ。

ある上ふ。我大皇國ふ良はしから惣名ある事ハ論あき
物うら。其神實を最も尊き大神ふ坐ませバ。粗畧ふ思ふ
ほきふは非ざゆあ正。此説いと長うるを此ふ大畧を
世界品の末ふ注。ちて因ふこく論ふほきあや有正。其
をほ扱神ふ位階を授奉正給ふ事ハ。人此甚く心得難ふ
はる事あゆぐ。今をいと重犯あやぐ爲る故ふ。其由あ
まふ記し辨ふほし。然ゆを天武天皇紀。壬申歳七月の處
了高市社。年狹社。村屋社の神とち。高市社を事代主神ふ
ふ坐せり。村屋社を幽ふ助奉正給へる事有
むいまど考得ば。天皇此御軍を。幽ふ助奉正給へる事有
あうバ。軍訖て後ふ敕登進三神之品以祠焉。とあり。此を

唯その社くの班列を上給へる事と聞ゆれど。是ぞ後ふ
位階を奉正給ふ事此起原とや云ほき。後の位階此事ふ
あ品と此みあ正て。二斯て正り位階を奉られし事は。孝
とも三むも記さまむ。謙天皇紀ふ。天平勝寶元年十二月の處ふ。八幡大神ふ一
品。比咩神ふ二品を奉られさる。是始あ正。然して二年正
月の處ふ。奉元一品八幡大神封八百戸。位田八十町。二品
比賣神封六百戸。位田六十町。とあり。祿令ふ。凡食封者。一
戸と見え。田令ふ。一品八十町。二品六十町。とあり。制の數
ふ合へり。是とゆ以前ふ。御紀ふ。崇神天皇七年。定天社。國
社及神地神戸。と見え。まど顯宗天皇三年。高皇產靈神ふ。
神田を献られさる事も有れど。品位の事ふ。あはら
ま。其をいまど。品位あどの御定。石原正明が言ふ。此時を。
をあき御世あれをぬるほし。

神封神田を寄らるは法紀爲す。品位を奉られあるりて。本
と正格式字立ふまゝとるふも非交。尊卑此階級とはては
所思ざりぬ。其れ此時代ハ万り位階を物委る事を多
功あき入り賜ひ。上正六位上を叙し。僧侶り二色九階を
置れとるも。皆此頃あり。然れど其り於りよて。加依事
も有し。之云正。然も有法し。是と正後は。稱徳天皇紀ふ。天
平神護二年四月此處ふ。甲辰伊豫國伊曾乃神。大山積神。
竝授從四位下。元神戶各五烟。伊豫神。野間神。竝授從五位
下。神戶各二烟とあると正次くふ。此政行をれと正。正明
加の八幡大神小一品。比賣神は二品を奉らまし以來承
和以前よをけ。此事無りしと云ふも。甚鹿あり上り
引とる。伊豫國の神等よ奉られしを始ふて。其間ハ數牙
も尽されま多るをや。さて神階ハ四品以上四階あり。

そ。文徳天皇紀ふ。天安元年六月壬申。在備中。國四品吉
備津彦神授三品。とあるよて。知べし。さて五位以上十四
階。正六位上一階。ま。法て十五階あるが。此。是と正此承
を令外の御制あり。正明も既ふいへ正。是と正此承
和。嘉祥。貞觀。元慶の頃は。神位のけ。數知らば見えと正。
然れども。多くは神封位田を充られ交。あ。其社く。お於
きての尊卑を。定。給。牙。位階と通也。故。本。り。尊。卑。神
り。本。々。り。卑。き。神。よ。位。階。の。高。低。も。多。り。正。ま。と。一。神。の。社
諸。所。ふ。數。あ。依。を。其。中。此。一。社。り。位。階。を。授。け。給。へ。る。を。そ
の。一。社。り。限。れ。る。こ。と。お。て。其。餘。ふ。關。り。こ。と。あ。し。其。故。お
同。神。同。社。と。い。ふ。牙。也。も。階。級。の。高。下。あ。依。事。を。辨。ふ。べ。し。さ
て。或。説。ふ。神。よ。位。階。を。授。け。奉。る。は。位。田。を。寄。ら。依。り。料。あ
り。と。云。へ。ま。ど。正。明。が。云。ふ。如。く。此。を。神。位。と。い。ふ。事。の。似
於。う。は。し。り。ら。應。故。り。さ。依。事。ふ。や。と。推。量。ふ。云。ふ。あ。り。そ
い。凡。て。王。臣。ふ。賜。ふ。食。封。位。田。を。其。人。の。あ。き。後。ふ。は。公。り
收。ら。る。れ。バ。限。あ。る。を。神。位。は。永。あ。れ。む。一。日。ふ。數。百。社。叙
位。せ。ら。ま。と。る。事。も。多。く。さ。ぞ。あ。り。度。く。此。加。階。と。よ。食

封位田を寄られず。天下の戸田は然れど別ふ。位階の稱
半小過て。社小附はて給むむら。其儘も用られぬ
を立らる。法きり。王臣を叙する位號哉。其儘も用られぬ
依を混むしけきと。此は正明説ふ。神を神どち此尊卑小
て。人臣此階とを別あ正と心得法し。内記式。神位記式。勅無位某神今奉授。
某位とあり。奉字を加さるばう正。不ても。王臣の位と異
ある。あや知べし。今云ふ。伊勢の大宮を始奉り。紀。国。日
前。国。懸。大神。あど。小。位。階。を。授。け。奉。ら。親。王。此。四。品。を。諸。臣
依。事。あ。し。あ。を。至。て。等。く。坐。故。あ。正。親。王。此。四。品。を。諸。臣
此。一。位。と。正。も。尊。也。を。思。牙。ば。神。階。の。五。位。六。位。を。親。王。此
一。品。よ。り。母。尊。く。御。坐。は。され。ど。一。品。親。王。一。位。大。臣。ふ。て。
六。位。の。神。を。拜。せ。む。小。禮。小。違。ふ。こ。ぞ。れ。し。然るを經信卿。母集。北野。社
の。前。よ。て。大。臣。上。達。部。み。あ。車。と。り。下。る。は。經。信。卿。の。み。
車。あ。ぐ。ら。や。正。渡。され。る。戎。官。司。出。向。ひ。て。此。所。よ。て。人

人も下させ給ふると云ふとも。さら然体よて。過られぬ
依由を。母の死。て。問。れ。ぬ。依。よ。彈。正。式。ふ。四。位。を。二。位。ふ
車。と。り。下。は。と。侍。る。菅。右。府。二。位。了。侍。る。了。神。は。あ。り。給
ひ。て。も。道。は。違。ふ。こ。と。を。有。ま。じ。ぬ。れ。ど。車。と。り。下。れ。ど。却
て。違。へ。る。あ。ぢ。り。て。神。も。受。給。え。ぬ。と。申。され。ぬ。由。見。え
と。さ。る。彈。正。式。よ。凡。四。位。以。下。逢。一。位。云。く。下。馬。餘。非。應。致
敬。者。皆。不。下。と。あ。る。り。依。て。の。事。あ。れ。ど。神。と。人。と。の。境。を
知。ら。れ。ぬ。定。ら。れ。ぬ。む。ハ。を。こ。れ。り。神。は。奉。る。物。を。幣。物
と。い。ひ。王。臣。了。給。ふ。物。を。祿。物。と。云。ふ。北。野。を。祈。年。穀。奉。幣
よ。預。と。り。ひ。て。祿。物。を。給。え。ぬ。か。く。の。如。く。品。類。懸。隔。あ。る
事。あ。ま。し。神。を。神。階。人。階。別。あ。る。故。ハ。明。う。り。あ。む。抑。あ。れ。ど。神
を。禮。ま。ひ。給。ふ。餘。正。ふ。か。依。事。も。出。來。初。め。と。神。は。神
を。敬。奉。正。て。御。坐。は。き。よ。尊。卑。の。階。級。を。御。心。了。任。せ。て。進
給。え。む。事。は。不。禮。あ。正。を。思。也。依。を。己。が。惑。の。深。き。ふ。や。と
言。正。此を冠位通考と云物不記せるを甚く約。此は一。お
此を冠位通考と云物不記せるを甚く約。此は一。お

より然る説とは聞ゆれど猶おらく考ふ依ふ古を品
位の御定、去ら無正しを其御定いで来て後も親王以下
諸臣ふれみ賜ふ法き事と思ゆ依ふ神等ふし母授け奉
正給ふことは凡人の上と正は如何とも推量正奉り難
きおとれをを神等と望み給ふ事は子有て此を普く
行ひ給ふ事と成ぬるはやぐて神の御心あるおと論ひ
おし然れど古ふ無き事お正として粗略お思ひ奉るべき
お非也故おく其位階の進み給へる趣を因史及び其
後の諸書お考合せて其大概を記去法し此おと委く参
考神名式の附
録お記し辨其は未だ文徳天皇紀ふ仁壽元年正月庚子
へむとに

詔天下諸神不論有位無位叙正六位上と見ゆおれよ依
て見る時
て天下の諸神悉く正六位上叙され給へるおと聞
ゆれど此時の太政官符を考ふるお品く差等あり其を
是まで既く五位おあり給へ依神さちりは更お一階を
増し無位の神をば新お六位上叙し給ひ唯大社并名神
を無位と云へども從五位下を授け給へりさて其外の
大社并名神あらぬ正六位下以下無位の神さちを
凡て有位無位を論ぜば正六位上おあり居給へる神さち
は叙位
お此時本よ正六位上おあり居給へる神さちは叙位
おく本の如くおめりし斯て朱雀天皇お天慶三年庚子正
月
月天下お諸神お位一階を増し奉正給へるおと諸書お
見ゆおまぞ諸神増一階の初度ある○是より前宇多天
皇の寛平九年十二月よ五畿七道の諸神三百三十
社より位一階を授け奉此後お白川天皇永保元年辛酉二
り給ふおと有正
月ふ又天下の諸神お位一階を増給へ正これ二是よ正
度あり

後は崇徳天皇此永治元年辛酉八月。まゝ一階を増し給ひ。おれふて 高倉天皇此治承四年庚子十二月。おれふて 安徳天皇此元暦二年乙巳三月。おれ五 土御門天皇建仁元年辛酉二月。おれ六 龜山天皇の弘長元年辛酉二月。おれ七 後宇多天皇此建治元年乙亥七月。おれ八 後圓融天皇此永徳元年辛酉二月。おれまで合せて九度。各一階増し奉り給へ。此うち多く辛酉年あるを。この天慶以下の処ハ。定まれる。圀史も無れど。諸書見えず。考へ集めざるあり。此書等のこと。此を煩ハ記され。然れど。文徳天皇此仁壽元年。推さば正六位上。叙せらる給ひし神等ハ。悉く正四位上。成給ひ。

そのうみ從四位下の神等ハ。皆正一位。成り給ふ。天慶より以來。凡そ四百餘年の間。右九度。此外。位階の進み給へる神等も。數ふるに違あらば。まゝ上。擧る外。己が見落せるも有べく。まゝ書し記し洩るも有ぬ。然れば。極位。至り給ふる。多うるべき事。推て知べ。然れども。永徳以後。増一階の事。聞えざるも。大抵。極位。あり居給ふ。故ある。扱ま。天下の諸神と。ある。付て。論ふ。法き事。何。其。ま。於。仁壽元年。有位無位を論べ。正六位上。叙し給ふ。と有るは。天下。此。有。由。神。さ。ち。の。事。れ。ら。む。は。此。餘。無。位。の。神。坐。法。き。謂。ふ。但。し。其。より。後。由。あり。て。新。齋。の。志。加。る。よ。此。後。無。位。某。神。ふ。某。位。を。授。け。奉。り。給。へ。ゆ。と。云。ふ。と。圀。史。を。始。免。其。外。次。く。此。諸。書。數。多。あり。い。や。不。

審^{タシ}死事^シあ^レ。依^ヨりて按^{オモ}ふ。天下^テ諸神^シとはあま^ミど。有^アり由^ユ依^イ
 神等^{カミ}ふは^ハ何^{ナニ}ら^ド。此^{コノ}を官^{ツカサ}ふて祭^{マツル}られ給^{タマ}ふを^ハじ^ス。国内^{クニノ}
 の神名帳^{カミナマチ}あ^ドふ出^デと依^イ。又は其外^{ソノ}ふも由^ユ何^{ナニ}ら^ド。官^{ツカサ}ふ知^チ
 られ給^{タマ}ふる神等^{カミ}ふ^ハ此^{コノ}み。御位^{ミタビ}を叙^シし給^{タマ}へ依^イふ。官^{ツカサ}ふ知^チ
 冠^{カウ}を給^{タマ}はざ依^イ。漏^{モレ}給^{タマ}へる事^{コト}と知^チられぬ。然^{シカ}らざれど、
 神^{カミ}と云^イハ、何^{ナニ}もまじき事^{コト}あ^レバあ^リ。凡^{ソノ}て神位^{カミタビ}封^フ戸^ドあ^ド
 此事^{コト}ふ付^ツてを論^ロふ。依^イ事^{コト}の多^{オホ}う依^イを今^{イマ}はあ^リ。神^{カミ}ふ位^{タビ}
 階^{カハ}を奉^{ホウ}り給^{タマ}へる。本^{ホノ}の由^ユ縁^ヰを論^ロふ。序^シふ少^{オホ}う云^イハ、此^{コノ}みぞあ^リ
 委^{オモ}くハ、参考^{サウコ}神名式^{カミナマチシキ}此^{コノ}附^ツ録^{ロク}を委^{オモ}くハ、参^{サン}考^{コウ}神名式^{カミナマチシキ}此^{コノ}附^ツ録^{ロク}
 此^{コノ}い^ハ事^{コト}を俟^{マツ}て見^ミるべし。

二

爾^ニ大^ニ虚^ニ空^ニ出^テ中^ニ一^ニ物^ニ生^テ而^シ其^ノ状^ヲ
コ、ニオホソラノナカニヒトツノモノナリテソノカタチ

難^ガ言^ク。浮^ウ雲^{クモ}出^テ如^ク無^ク根^ノ係^ガ出^テ所^ノ而^シ。
ガタクイヒウキグモノゴトクナキガネカ、ルトコロシテ

久^ク羅^ラ下^ゲ那^ナ洲^ス。漂^タ蕩^バ出^テ時^ニ自^ラ其^ノ中^{ヨリ}。
クラゲナスタバヨヘルトキニヨリソノナカ

状^カ如^タ葦^チ牙^ゴ出^テ。初^ハ生^ケ於^テ泥^ニ中^ニ而^シ有^リ。
カタチゴトクアシカビノオヒソムルガヨリヒヂノナカレテアリ

萌^モ騰^エ出^テ物^ヲ。因^テ其^ノ物^ヲ而^シ始^メ成^ル坐^シ神^{カミ}。
モエアガルモノヨリソノモノニテハジメテナリマセルカミ

出^シ御^ミ名^ナ。宇^ウ麻^マ志^シ阿^ア志^シ訶^カ備^ビ比^ヒ古^コ。
ノミナハウマシアカシカビヒコ

遅神。次天出底立神。亦常立神。亦

云天出壁立命。亦名天角凝魂

命。亦云天角已利命。亦云角魂

神。此二柱神亦獨神成坐而隱

御身矣。

上件五柱神者。别天神。

爾ハ許く、邇と訓ばし。上を受けて下を起處所ある故小置
とす。其ハ師説ふ。古事記の文法。處ばて一連の語終りて。
次の語此首ふ。加れらば於是とも故也。爾とも云ふ。
此、三乃辭を用ゝる様を考へ合はるふ。其處の語此
勢小隨ひ。調ふ任せて置る此みふして。必志も各異あ依
意此何る。是非交はれむはと故爾とも故於是とも重
祓ても置る。其も同じあせれ也。但し右の三此うち。爾字
勢ある處多。ゆゑ故爾と重祓とるを多くあまき也。も
爾於是と重祓とる處を無し。こまを思へむ。みあ許く
爾と訓べくして。加礼とは訓まじ死が如し。然れども又
稀ふ。故字を置る勢也。全同くあて。許く爾と訓む也。
加礼と訓ぐ優。大の爾とも。於是也。故也。有ハ。皆
れる處もあり。

今此俚言イヤレキコトふ曾許傳ソココトといふ勢イふ依處ニ也也

爾字於祐も曾能と訓免也

許とおの於うら意通へり。まと爾時を曾能登伎と訓て
も許能登伎と訓ても意通ふを許能と許くや同じれ
ば許く爾を訓ことおの於うら字義ふも合へり。まと是
や如く是と本同言ふして迎礼を如是有者の切也。ある
れ。自迎礼と訓。○大虚空之中は。一書は天地始免の処
も自通へり。○大虚空之中は。一書は天地始免の処
ぬれど末うた虚空と書されむ。其於富蘇羅能那迦邇と
ふ扱也。大字茂冠て文を成せり。於富蘇羅能那迦邇と
訓ばし。一書は虚空中ともふソラノカヤ訓み。其中を
て當時の俚言ソノカヤ。即いま大地の周外メグリ不見晴して。大空とい
や聞えと也。

ふ際タキ此空ソラし死宙アソビをひろく言フ也也。空ソラきを曾羅ソラふ言フ也也。
十。蒼天也。往來ふ吾去ら。四。三空也。く月の光。五。阿
麻能見虚喻。阿麻賀氣利。見渡多麻比。云くおどある類也。
此。謂也。大虚空を云ふ。あれど十八。こふ依曾良や
はくし有。祐む十五。みちの蘇良道。別去る君。四。思

空安うらあくよ。嘆虚安うらぬ物を。二。天數ふ凡津子。
十一。心空あり土を踏ども。まと朝茅原小野うあ免也。
ふ空事を九。吾が念情安き虚うも。十一。月の空ある
恋も去るうも。おど詠る類也。空し死こと。をいへり。後の
詞も。空寐虚泣。虚言おど言免り。されむ。年那斯の年也。
身を年とも云と。同語りて。無実の義ある。ぼく所思也。

○一物生而は。御紀正書。生一物。と何依ふ。因て。比登都
乃母能那理氏と訓べし。一書は天地初判。一物抑此段也。

師言の如く。天地の成る初發を云ふ。て。先其初。ふ。此物
此生出ナリイデと依ふ也。はて此物も何物ぞと云ふ。是即ち天
日。大地。月。豫美の三。ふ成べ。此物ふして。有。ある星ども。
所思る由あり。其考ハ。第百廿。其物等此未分ま。一。了清
六段の傳。注委を見べし。其物等此未分ま。一。了清
正て沌ムカシある也。御紀の最初。ふ。天地未剖。陰陽不分。渾沌

出来し。此を實ハ。大空に現れ出と依象也。妙不奇也。何とも名け難く。加於顯露。言ふ可うらげ。會易構合。此貌あはし故。言ひ難しとは傳へあるれ也。此を前。の譬へ云ふ。物なきを云。りて。信。其物の形状。むらとして。何とも言が。りて。故。あらむ。と思。り。は。惡。う。正。き。其。を。い。う。ふ。と。あ。ま。ば。溟。滓。而。含。牙。を。云。へ。る。り。て。其。形。状。の。大。凡。を。知。ら。ぬ。を。譬。へ。難。し。と。云。ふ。意。は。を。云。べ。く。も。非。ざ。る。を。や。此。を。實。を。構。合。の。状。抑。あ。の。一。物。ありし故。言ひ難しと云。依と著明し。今かくしも。天地と分判るべき期。ふあて。あそ。會易構合の形状とも見え。初。始。て。生。出。り。む。時。を。決。定。て。い。や。小。く。唯。混。沌。と。る。れ。み。ふ。て。其。中。の。状。あ。ど。見。分。け。ば。き。や。う。は。非。ざ。り。む。を。幾。千。年。を。う。過。行。く。ふ。隨。ひ。て。

や。や。ふ。大。く。成。も。て。行。て。終。ふ。會。元。易。元。れ。ど。も。名。之。法。き。形。状。と。を。寫。れ。る。あ。依。べ。し。此。を。正。し。き。證。と。爲。す。兒。の。初。始。て。胎。内。小。宿。り。な。む。時。よ。り。月。滿。て。生。る。ま。で。此。成。立。を。想。ひ。や。て。か。く。ハ。推。量。に。云。あ。り。必。同。じ。理。あ。る。べ。く。ぞ。所。思。ゆ。猶。こ。の。一。物。の。事。を。普。く。外。圍。の。古。傳。を。考。へ。證。し。て。思。ひ。得。と。依。説。あ。る。を。其。を。赤。縣。太。古。傳。印。度。藏。志。あ。と。よ。記。せ。○浮雲を。宇。伎。久。毛。と。訓。べ。し。一。叢。れ。む。此。ハ。言。む。也。放。ま。て。漂。へ。依。雲。を。云。ふ。天。神。壽。詞。よ。天。忍。雲。根。命。天。乃。浮。餘。の。傳。く。ふ。は。游。魚。の。水。に。浮。ぶ。に。譬。へ。或。ハ。浮。膏。あ。ど。も。譬。へ。と。る。は。師。言。此。如。く。其。物。を。脂。の。如。き。物。魚。の。ご。を。死。物。と。謂。ふ。を。非。ざ。ま。ど。も。形。あ。る。物。を。も。て。譬。ふ。れ。む。ふ。と。あ。て。む。其。物。の。状。よ。思。成。る。事。あ。れ。む。中。く。ふ。こ。ろ。し。○根。係。之。所。は。泥。加。く。流。登。許。呂。と。訓。法。し。御。紀。よ。も。け。て。此。浮。雲。を。あ。ぐ。一。物。に。漂。り。る。状。を。譬。と。る。れ。み。ふ。て。彼。一。

物を浮雲の如き物と云、依りは非交。思ひ紛ふ依おと勿
ま。○久羅下那洲也。古事記ふかく有ふ據れ也。言義久羅
下ハ久羅具禮と云おや此約まて。久羅具禮也。久羅
久羅。久禮久禮ふて。一の物此。會易構合の状。牙を含免
る。活發の氣勢何て。或ハ明く或も闇く。久流く。久
羅く。久禮く。せしむ。有む状を云。了るれ也。して那
洲也。久羅具禮登志氏と。久羅下那志氏と。有べき處
れるを。那洲と云へる也。是も古言の體あ依る。師説よ多
の枕詞あ也。漂蕩へ依状を譬へて云。るも非交と有れ
ど。然らば其状を云。了るれは。は世の始あるよ。
冠辞おどやらの虚辞有。は。非交。然依を枕詞れりと
云。ましハ。言義を思ひ得られざる故あるべし。然まぜ是

よ。て。て。後。も。何。小。依。ら。ば。漂。へ。る。物。の。類。り。冠。ら。せ。て。
云。こ。と。も。成。ら。む。凡。て。枕。詞。此。出。來。と。る。例。大。抵。う。
く。此。又。若。く。は。壯。鹿。那。須。如。五。月。蠅。水。泡。那。須。お。と。云。ぐ。如。
之。後。世。此。冠。辭。の。體。ふ。い。か。と。れ。く。斯。を。云。來。お。る。ふ。も。有。
依。べ。し。前。小。成。文。を。撰。修。す。時。思。へ。ら。く。水。月。ち。ふ。物。を。
物。を。其。海。上。り。浮。す。る。事。う。と。思。ひ。混。ふ。べ。く。思。ひ。て。此。語。
を。除。き。と。る。事。ハ。古。史。徵。り。委。く。云。へ。る。が。如。し。然。る。を。後。
に。猶。よ。く。思。へ。む。此。詞。あ。依。り。と。一。物。の。有。様。い。と。も。く。知。
ら。る。故。よ。省。り。ば。本。此。如。く。書。あ。依。り。さ。て。此。海。中。小。
生。依。水。月。ち。ふ。物。を。今。此。一。物。の。大。虚。空。よ。根。係。る。處。お。く。
漂。ひ。と。ゆ。ら。む。状。ふ。似。と。る。故。よ。其。名。を。負。へ。依。あ。り。此。
前。後。を。心。得。る。時。は。海。を。既。り。有。む。の。疑。ひ。○漂。蕩。之。
時。古。事。記。ふ。多。陀。用。幣。琉。之。時。也。依。り。依。て。訓。修。し。漂。
宇。を。神。代。紀。上。件。大。虚。空。乃。上。方。と。る。高。天。原。よ。か。の。三。柱。
よ。と。れ。也。

神ハシメ御坐シせる。其シタベ下方ニ此ソラ空ニ。此ハ一ツ物ハ生ナリ出テて。其ハ状ヲ言ヒ難ガタ々ニれズ。虚空ハ漂タビふ。浮雲ハの何イッ處ヲを根トと係カる所ヲあクて在ラぐ如クして有リ。依ヨ由ヲあハす。師ハ云フ。此ハ物ノうク漂ヒあル。虚空ハ中ニあり。書紀ハ。虚中トも空中トもあハ依ヲを見テ知レべし。然レるを如ク。浮脂ハをいヒ久羅下ハ那洲ハれズも有リ。就テ此ハ物ノ海上ニ漂ヘり。と心得ハむハいハく非ハあり。此ハ未タ天地ニ成ラざる時ニて。海ハも無レば。虚ハ空ハ漂ヘるハあり。加ヘく。海ハもあル。浮キ物ハも。此ハ漂ヘる物ノ中ニ。小ハ真ニまレれるハぞウし。○自ヨリ其中ニとは。彼ハ大虚空ニ。中ニ小ハ生ナ出テ。漂タビ蕩ヨへ。依ツ一ツ物ノ中ニとハ正シあル。師ハ云フ。○状ハ如ク葦ハ牙ハ云ク。葦ハ牙ハ師ハ云フ。阿ハ斯ハ訶ハ備ハと訓レば。訓ハ書紀ハも然ル。を清クて。伊ハの如ク。誦ヲをシ。ろシ。はハと詞ヲを濁ルも。和名抄ハろシ。成シ。坐ス。神ハ御名ノ訶ハ備ハよテ清ク濁ル。炳ハ焉ハ。和名抄ハふ。蘆ハ葦ハ兼ニ名ニ苑ハ云フ。葎ハ一名ハ葦ハ爾雅ハ注ハ云フ。一名ハ蘆ハ和名ハ阿ハ之ハと

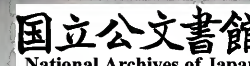
見ル也。葦ハ牙ハとは。葦ハのうク初ニと依ヲを云フ名ハあハす。牙ハ字ハは芽トと通ヘす。和名抄ハふ。玉篇ハ云フ。蘆ハ莢ハ也。莢ハ蘆ハ之ハ初ニ生テ也。和名阿ハ之ハ豆ハ乃ハとハゐル是ハ葦ハ牙ハあハす。葦ハの初ニ生ルを角ハ具ハ牟ハと云フ。故ハ。葎ハ角ハとハも云フ。あり。さて如クとは。此ハ其物ノ形ハ。葦ハ牙ハふハ似ト依ヲあハす。只ハ萌騰ハるハはまの似トるハ此ハみハよク非ズ。故ハ。書紀ハも形ハ如ク。葦ハ牙ハと。此ハふハ因テ。成シ。坐ス。依ル。神ハ御名ハふハし。母ハ負ハせ奉ルしを以テ。其ハいハく似トあハす。むハ程ハをハ知レべク。今ハ云フ。此ハあル如ク。状ハ如ク。葦ハ生ル依ル。如クしてと云フ。○泥ハ和名抄ハふ。和名比ハ知ハ利ハ古ハ一ハ云フ。古ハ比ハ千ハと見エ。後ハ哥ハよク多ク恋ハ路ハ。祝詞ハ文ハ。向ハ股ハ爾ハ泥ハ畫ハ寄ハ氏ハあハとハゐル。土ハ水ハの消ハあるハよテ。俗言ハふ。杼ハ呂ハと云フ物ハ

とは其物の天と成れる。其底に成坐る故の御名あるを以て知るあり。其下は此神名を師に解れと依茂見て知べし。また此も元騰れる物の天と成坐るに就て師説ふ。阿米てふ名は葦萌の切に云ふ。斯の省るに説ふ。や有む。葦ハあ。譬ふ云る物あれども成坐る神の御名も負給ふれむあり。と云れとまぎ。已が考は上は云へ依如くあ。抑彼物も。天と地と未分まじして。多先れを採らば。一沌ふ成ま依ふて。其中ふ天とあるはまき物も。萌騰りて天とれ。地とれ。るはまき物も。分て翕りて。後ふ地とれ。ま依あまむ。是正しく天地の判まするあ。地の成るを女男此大神此段然るを此ぞ天に初免。此ぞ地の初免れど。際やうふ。加しくは言はして。只其時神に成坐る由縁ふたて。如此ああらふ語に傳へるは。眞ふれどやうれる上代の

傳説ふて。いをもく。貴くあむあ。今云神代紀に。割渾沌如雞子。溟滓而含牙。其清陽者薄靡而為天。重濁者淹滯而為地。云々。天先成而地後定。とある。漢土に遺れる古文あるを。我が眞の古傳に合へ。依説あ依故。御紀の卷首に。先出れを載られ。る物あるべし。然るを師にいとく。惡まきするを。一偏あり。此文の漢土に遺り傳へる。其を。あど。の惡。け。て。如此。一物に生初免し。も。其の分まむ。こと。の。有らむ。て。天地を成まするも。は。此。次。の。神等。に。成坐るも。悉。よ。皆。二。柱。の。産。巢。日。大神。の。産。靈。ふ。因ら。ば。と。云。こ。を。れ。し。中庸云。其産靈といをもく。靈あ。く。奇しく。妙ある物。よ。して。更。了。尋。常。の。理。を。母。て。測。知。る。限。ふ。あ。ら。ば。然。依。を。漢。人。れ。ど。此。天。地。に。始。ま。る。さ。く。臆。度。り。て。加。し。去。げ。り。説。ふ。に。た。皆。こ。の。産。靈。の。神。靈。よ。因。て。生。こ。を。知。さ。る。故。に。妄。説。を。有。り。篤。胤。お。此。師。説。ふ。依。て。猶。考。ふ。依。ふ。顯。宗。天。皇。

紀三年二月此處。月神此人著て御託ませる詔言
ふ。我祖高皇產靈神有預鑄造天地之功。宜以民地奉云々
也。詔へてしうば。山城國葛野郡歌荒櫟田を奉て給ひ。今
重字の下ふ神字あきは。脱するあり。今補ひて引於下と
まよ。效ふべし。ちて預て字書ふ。豫也。先也。ともある義を
取て。書れしふれ。其意を得て。ハヤク也。訓造し。まよア
ラカジメ也。訓むも然るべし。師も預鑄造と訓て。伊邪那
岐。伊邪那美大神の國土を生。成。まよハ。諾。事あるよ。因て
預とハ云。るありと云れし。字。前よは。諾。事あるよ。因て
とく思。牙。む。此も字書。及也。参也。とも有る義。ふ見られ
さる。うて。委。あ。ら。び。彼。二。柱。神。の。國。土。を。生。成。給。牙。る。も。即
皇產靈大神此產靈。因。と。ある。を。い。あ。て。預。同。四。月。此
とハ云。む。ま。よ。今。本。よ。預。鑄。造。也。訓。依。も。非。あり。同。四。月。此
處。ふ。日。神。の。人。ふ。著。て。御。託。ま。せ。依。詔。言。ふ。以。磐。余。田。獻
我祖高皇產靈神。と詔へてしうば。詔言は。は。ふ。く。獻。て

給ひ。對馬下縣直をして侍祠。志。免。給へ。也。此。日。神。の。詔。言
造。給へ。る。功。の。事。を。詔。ひ。ら。む。字。前。の。月。神。の。詔。言。ふ。也。ち。り。て。省。け。る。れ。依。べ。し。鑄。造。也。漢。籍。ど。も
小。造。化。之。所。鑄。造。也。あ。ど。見。え。て。無。也。志。物。を。自然。此。運。行
不。依。て。造。作。と。し。ふ。言。れ。む。然。る。意。を。得。て。本。無。也。し。天。地
を。造。出。給へ。依。事。よ。成。文。さ。ま。ら。む。和。名。抄。よ。漢。書。注。云。鑄。鐵。形。也。和。名。伊。加。太
と。の。ち。て。日。神。月。神。と。も。小。伊。邪。那。岐。神。の。御。子。あ。依。よ。皇
產。靈。神。を。我。祖。と。詔。へ。依。事。を。上。ふ。も。言。依。如。く。產。靈。の。本
於。皇。祖。神。ふ。て。有。也。る。神。等。も。み。あ。此。神。の。產。靈。よ。因。て。成
坐。お。れ。む。れ。也。あ。本。前。段。よ。注。せ。る。言。ち。て。師。も。言。は。れ。し
如。く。是。時。の。由。縁。と。見。え。て。山。城。國。葛。野。郡。よ。葛。野。坐。月。讀



神社。名神大月 大和国十市郡。高御魂神社。二座。次新嘗 大月

○かの献_レ給へる磐余田は、やぐて此郡に在り。さ次新嘗 對馬

て此二座の中一座を、決_レて神御魂神なるべし。

国下縣郡。高御魂神社。名神大 おど神名式不見えとて抑

かく後世まで、其處より重く祭祠_レ給ふを以て、彼神著

の詔言_レ此小縁_レからぬ程をも、皇産靈神の御功_レ此大なる

本_レをとも想像_レて奉るべし。あや此事を、顯宗天皇卷 古事

記序ふ。參神作造化之首。と何依參神を。天之御中主神。高

皇産靈神。神産靈御祖命を申せるお也。此文をもても、古

く産靈神の天地を造_レて、万物を産成_レるなりと云。古傳

を尊信_レするおぞ我思ふべし。造化とハ、漢籍_レも、天地

の生_レ成り出るをいへり。はと是_レ不_レ就_レて按_レふ。天之御中主神ハ、御名

此大_レれる不_レ取_レては、其事蹟の傳_レお也故_レ。神徳を伺奉る

は、き便_レおけれど。二柱、皇産靈神とて前_レふ。始_レおく御坐し。

女男_レ此御徳を兼_レ有_レち、爲_レこと無_レあて。産靈の根原を司_レ給

ひ_レる。寂然_レお坐_レまし。女男、産靈大神は、其神靈_レお資_レて生_レ出

坐_レして。産靈の徳用_レを持_レ分け宰_レ給_レひて。天地も何も。此二

柱、大神_レ此産成_レし給へる事とぞ思_レえは、故_レ舊_レく天御中

主、神長男、高皇産靈神、次神皇産靈神、と云_レる傳_レも有_レり也。

此事ハ、古語拾遺、異本_レ見_レえ、ま_レ神皇正統記_レも、此説

を記_レされとて、然_レれど、天之御中主神の事跡の聞_レえ給_レえ

ざ依_レを、幽_レ死_レ所以_レある事_レよて、却_レりて其神徳_レ此大_レお

る故_レりぞ有_レべき。其御社さ_レり、式_レよ_レ見_レえ給_レえ、_レて

此葦牙ふして萌騰まゐる物と。其間去そ地と連ぶて在る。後には地と斷離れて。今見放る天日即是也。斷離れハ第五段の傳はかくる此を阿米也も云かた天字を充るも熟當れ也。其は漢国よても古く天と稱しは即天日也。去とぬきは也。讀此己いと若くて漢土の古書も去也。有るは上帝とも天帝とも云は其を宰る神也。古傳ハ理の合むを思ふ。易も乾为天の天も日象ふく。ハ聖の眞柱を著せる時。其説を云し。字文政六年十一月。京より此歸路。駿河の府中ある山梨玄度。より寄れる。己の主との間漢字此誤を正して書著。玄不どあれむ。己の既る思へる旨を語り。其説も主實もと諾ひて。其夜に。日と大と。小考。予て書記せる。其説も古文よ。呉と書て。日と大と。小考。予て書記せる。其説も古文よ。呉説文よ。日。実也。大陽之精不虧。从。一。と見え。楚辭の東皇

大一を王逸注。大一。日也。有て。九哥。小。皆日を詠ぜり。説文よ。大。字。注。天。大。地。大。人。亦。大。故。大。象。人。形。と。あ。也。然れ。む。吳。字。の。象。ハ。日。人。上。り。在。り。象。れ。る。字。あ。る。を。秦。子。至りて。篆。書。を。作。る。時。日。也。此。〇。を。省。きて。天。と。作。依。あり。加。思。ふ。べ。し。然。る。を。釈。名。よ。天。坦。也。坦。然。在。上。也。と。云。る。ハ。古。説。天。也。と。云。る。を。漢。儒。の。安。子。土。を。加。牙。坦。也。作。り。て。説。を。成。せ。也。其。也。且。字。古。文。也。且。と。作。て。説。文。明。也。从。日。見。一。上。一。地。也。詩。大。雅。界。天。曰。且。也。何。り。て。曉。べ。し。加。く。て。且。字。又。神。字。の。音。義。何。り。そ。を。禮。記。郊。特。牲。よ。所。以。交。于。且。と。有。る。所。此。鄭。玄。注。且。説。為。神。と。い。ひ。莊。子。大。宗。師。よ。有。且。宅。而。無。情。死。と。あ。る。且。を。釈。文。よ。説。為。神。と。い。り。是。を。も。て。且。の。天。あり。神。ふ。依。こ。と。知。べ。し。さ。て。尚。書。よ。肆。類。于。上。帝。と。あ。る。を。鄭。玄。注。了。馬。融。曰。上。帝。大。一。神。云。く。王。肅。曰。上。帝。天。也。と。云。る。を。彼。土。此。古。傳。説。あり。此。等。を。通。考。し。て。思。へ。む。神。聖。不。測。の。義。と。り。神。と。も。且。と。も。天。と。も。い。ひ。形。象。と。す。日。也。神。聖。不。測。の。義。と。り。神。と。も。且。と。も。天。と。も。あり。神。旦。天。古。く。は。同。言。て。天。の。古。音。を。旦。と。り。一。は。即。天。字。世。分。て。三。音。と。せ。る。あり。猶。言。は。易。乾。為。天。の。乾。字。も。後。説。文。よ。撰。る。よ。且。ふ。从。ふ。字。あ。る。を。以。て。天。此。且。あ。る。こ。と。

を思ひ定む。然し古文を其象何れぞ必其義あり。乾字も
且り从ふ故。日の象何り。東皇大一と。上帝大一と。一大
小从ふ。天字を合せて。古文制作の本を知り。日一。上上。在
る。且と。一人。上上。有る。天と。合せ考へて。自得をば。是。天
日。上帝の古義。亦云く。を言へり。甚精。ちて。阿米とは。も
しき考。亦ま。其ま。あ。り。注し。扱。を。大虚空。此。疆界。を云々。む事ハ。既。上。り。云。子。る。が。如。く
亦。依。ふ。天。日。成。て。よ。也。後。を。專。と。天。日。を。阿。米。と。云。ふ。や。々。
爲。れ。る。は。如。何。あ。る。故。あ。ら。む。や。考。ふ。依。ふ。此。は。或。人。の。説。
小。阿。米。と。を。固。く。上。方。を。云。稱。あ。る。を。今云。阿米とを上。方。む。か。也。非。交。
実。を。上。下。四。方。泄。る。処。あ。く。罹。れ。る。物。あ。る。が。故。り。天。日。
云。あ。れ。と。も。今。を。只。打。見。あ。る。処。を。以。て。云。ふ。依。べ。し。
の。然。上。也。て。漸。く。小。大。く。其。相。去。る。と。未。遠。う。ら。げ。也。し。
頃。を。大。地。を。覆。ふ。ば。う。也。ふ。し。有。災。ま。ば。本。と。也。の。阿。米。て。

ふ方は見えぬ成て。唯。天。於。日。を。此。み。仰。ぎ。見。扱。ら。む。故。
よ。い。扱。と。無。く。移。也。て。天。日。を。阿。米。を。云。習。ひ。ら。む。ぐ。自。か。
ら。其。名。を。ハ。成。れ。る。亦。依。べ。し。と。云。子。也。此。説。一。わ。あ。也。を。
然。る。と。よ。聞。ゆ。ま。ど。も。熟。思。ふ。よ。此。は。亦。の。御。国。と。り。稱。
ふ。處。よ。して。天。於。御。国。の。本。稱。ふ。を。有。也。う。ら。交。故。考。ふ。依。
ふ。は。於。阿。米。と。云。言。義。を。阿。米。と。同。言。よ。て。其。は。世。ふ。有。と。何。
依。物。悉。く。其。中。小。罹。れ。る。を。以。て。云。名。あ。る。と。や。は。既。上。
り。云。へ。依。ぐ。如。し。前段の傳。見。る。也。し。斯。て。天。日。は。も。此。世。の。中。此。大。
之。廣。く。限。亦。死。ぐ。如。く。亦。依。ふ。比。也。を。狭。く。小。く。は。有。れ。
ど。其。を。と。廣。く。大。あ。る。と。や。也。此。大。地。を。百。ち。計。也。も。集。災。と。

らむが如く。其徑數十万里ある由に聞ゆるが上。此の西
の國より貢ぎもて來し測量術の器もて測り。大地とは
試むるよ。違有まじく思はゆ。事おれどあり。大地とは
異て。其國土外表に附るに。悉く内裡方不在る御國あ
る。おとは。下第百九段の傳。ふ云へる如ぬあるが。其内の空虚れ
依處も。廣大きある。右に準ずて推量ぬ。さまむ
其中に坐り天津神たち。此大地に居る人。此大虚空の疆
界を見はるうに如く。天御國の疆界をも見回らし坐
て。直ちふ阿米と指し詔ひ。其内此空らふ廣き處を指て。
天の原とを詔ひ。む。其大虚空の上方。天は眞區とる
て。悟る。此は大虚中と。天に御國の其中と。大死小き違ひ
べし。

おそ有ま。共其疆界に打圍ゆる處を指て。阿米と云は
き事あること。心を平うふして熟思ひ辨ふ。○因其
物而因ハ從ぞ云と同意よて。此萌騰る物よ。生坐坐
あ。されむ此物。在れち。次ある二柱。神とあるよ。非
ハしき傳。あまき。此を天。日と成れ。ちて此物。不從て生坐
る事を。直小神を云。るよも有べし。ちて此物。不從て生坐
依神を。師言。此如く。次あ依二神あ。其故は。此二柱以上
を天神として。段を結。え。依を更ふも言を。次段。不見
え。さる如く。國之常立。神の生坐るは別あ。立。神あ。どを
も。此。葦牙の如き物。因て生坐。とせば。此物。天にまむ。
彼神。ちも天。神とる。さきよ。然らば。して。天神を。天之常
立。神まで。あ。天之常立。國之常立と申。御名も天と地を

ふ依三柱神も成坐しふは有べけき也。天地の未無也。以前と在在は其成坐し始を知る由ふ死を。此神字ば。既三柱神御坐て。其成始字知看むこと炳也。故次次。如此を語傳と正けむ。して此神を。決然て少毘古那神と同神あるは思ふ由緒あり。其は下注也。第十一の傳。○天之底立神。亦云天之見るは。御名義師云。登許と曾許と通じて同じ。云。登許と何也。御名義師云。登許と曾許と通じて同じ。よも底を登許と云ふやあり。さて底を下の極を云ふ。巴圀の底とは云はれど。天之底と云むとやいかに。と思ふ人有。凡て底とは。上ふは下ふまき。横ふは至べれど。凡て底とは。上ふは下ふまき。横ふは至也。極まる處を。何方ふても云。万葉十五。安米都知乃

曾許比能宇良爾と何也。宇良を内と。此を以て。天ふも云。はきよとを。紫式部日記。そこひも知らず。清ら源氏物語。あど。まと六。藤原宇合卿。西海道節度使。罷ら。依く時の。高橋連。蟲万呂。此長歌。筑紫爾至山。乃曾伎野之衣。寸見世常伴部乎。班遣之。と何る曾伎も極みを云て同じ。云。細く云と死を。曾伎を曾久を。離言。遠ぞく。退あど。此曾久あり。かくて其を。離言。曾伎と云。曾伎との處を云。言。曾伎。まよ。曾許と云。死を。許を。彼。此。處。あど。の。處。りて。曾伎。處。の。意。れ。也。故。曾伎。と。意。は。全。同。じ。き。れ。也。さて。曾伎。も。曾許。も。離。放。る。處。を。云。て。お。の。ち。う。ら。其。離。放。り。云。ふ。あり。極。の。は。と。四。ふ。天。雲。乃。遠。隔。乃。極。遠。雞。跡。裳。九。ふ。天。雲。乃。退。部。乃。限。訓。を。誤。れ。り。次。了。引。る。哥。ふ

て知十七。山河乃曾伎敝乎登保美。十九。天雲能曾伎
敝能伎波美。はと三。天雲乃曾久敝能極とも何。敝也。
末と塞を曾許と訓むも。境域の極界此地ある哉。謂ふ。は
常世。圀を云ふも。字を借字ふて。常ハ底ふて。右の意も
同じ。此事も。少毘古那神の処。委く云を考へ見るべし。
○今云。己が常世此圀此考を。師説と異あり。そは第
九十四段。云。立は都知と通ひて同じ。此例を。書紀。一
ふを見べし。立は都知と通ひて同じ。圀。狹立。等。示。曰。
何。是あり。凡て神。名。小某豆知と云多し。其義ハ野椎神
の下。云。云。今云。第十三段。然れば此。御名を。常立を借
字。て。天之底。都知。今云。底立の立を。若くは曾。理
れる。ふ。非。ざる。然らば。抑天は。下。上。子。萌。騰。ゆ。て
立。正。字。あり。猶。考。ふ。べし。

成し。の。ば。阿斯訶備比古遲神。下。生坐。ま。ど。も。先。れ。也。
其始。葦牙の如く。れ。也。天之底立神は。其物の漸。騰。ゆ。て。
し。時。ある。が。故。あり。騰。ゆ。極。ま。ゆ。處。生坐。む。故。上。生坐。せ。れ。ど。も。後。れ
也。然れば此二柱神の成坐る次第。自。扱。う。ら。如此。く。ある
べき物ぞ。然るを。書紀。う。た。此。次第の。反。さ。ま。ある。も。上。り
る。傳。ふ。成。坐。ゆ。を。以。て。先。に。挙。げ。下。に。成。坐。る。後。に。挙
げ。る。也。○天之壁立。命。壁。を。加。倍。を。訓。法。也。此。名。の。お。と。
と。訓。て。上。り。師。の。引。れ。る。万。葉。歌。ふ。山。河。乃。曾。伎。敝。ま。と。
天。雲。能。曾。伎。敝。あ。ど。何。る。曾。伎。を。れ。ち。是。よ。て。曾。許。は。あ
登。許。と。全。く。同。言。れ。り。と。思。へ。ゆ。し。を。ま。其。は。伊。勢。大。御。神
と。思。ふ。旨。あり。て。後。に。加。く。訓。改。め。り。其。は。伊。勢。大。御。神
ふ。白。の。祝。詞。に。皇。大。御。神。能。見。霧。志。坐。四。方。圀。者。天。能。壁。立
極。圀。能。退。立。限。云。と。何。る。處。の。縣。居。大。人。考。ふ。壁。を。加。倍

と訓て。天比壁の如く。四方不側ちて見也。依を云と注れ
多依不從牙ゆ。此をソキと訓ては。次の退を何せう訓む。字此異なるを。同言不非ざるが故あり。儲
此底立神は。天於御國の内子成坐りと聞ゆるを。今の説
は。其外ある天つ曾良比疆を云あまを。甚く違ふるが如
くあれど。此を大うと同一状あるべく思
たるを。相通はして云牙るれるはし。立の意は上小
注るが如し。然れむ上の底立常立もを語は替れども大
抵同意の御名あす。れ不上下よ云る○天角凝魂命。角を
都奴凝を許理魂を多麻と訓べし。凡て神の名よある魂。字も多麻と訓べきと
牟須毘と訓なきとあるを。れはて牟須毘をの訓よや
ぞ心得あるを漫あり。其を姓氏録ある掃守連祖振魂命
恩智神主。祖伊久魂命。あどの魂を牟須毘と訓む人多う
れど。振魂命を八木造。祖布留多摩乃命とあるを同神ま
と伊久魂命は。舊事紀う。天活玉命ともあれど。共は魂を
牟須毘と訓べうらむ。此を推牙て。餘をも牟須毘と訓べ

き證を得ざらむ限を。多麻と訓なきことを辨ふはし。大
國魂神を。まゝ大國玉神をも書とまむ。此は云も更れ正
ちて角凝魂と負坐せる御名義。下ある豊斟野神。まゝ角
檝神の御名義ハ。師説の如く。物の凝集り。角具牟意ある
よ依て思ふよ。天之底立神を。加比牙比角具美て。漸く小
大比く萌騰れる。そ此底了生坐て。即て其を凝し固免て。
天日比御國と成給へ依神ある故よ。かく御名小負給牙
ゆと所思也。そを次ある豊斟神の下小。未あ角已利命。注ふを合せ考へて知るはし。
やも申すを。魂てふ言を省死て申し。角魂神とも申すを。
疑を省死て申せるうて。異な依義あし。かく神名を省死。ても申せるあし。
餘神とちふも。按ふよ。古比亦御名ども。皆角てふ言。残頭

小負あるは唯角具美と依由のみを非で角とを直ち
牙を云ふも有法し。其を彼牙てふ物を男易の形あり
よ。後み男根を角のぬくれせけりて神名式小出雲国神門
郡小比布智同社坐神魂子角魂神社に。風土記抄み古
明神也と見ゆ。まとも風土記解み古志郷日淵川を保知石
川と云せられぬ。保知石の保知を比布知の畧語あり。○
師説み角凝魂命とみ角魂神とは同神と見られしを
宜おれど角織神を同神み解れしを名義比似しを故の
こやぬまを甚く違へり。此を正み天之底立神みけりて葦
坐よと第四十九段の傳ふ委く注を見て知ばし。けりて葦
原中固御言向段ふ御名れ出さる天津国玉神と申はを。
御名の小縁からに聞えて天於固小坐依をもて考ふるふ。
決然て天之底立神ある法く所思とて其ハ固玉とは下

よ注ふ如く其固くを修固然て功績あるとて負ふ名あ
るが。第八十六段角凝と稱を御名に天固を凝し修理せ
依趣あるよ思合せて辨ふ法し。然れども未正なき證を
を挙げまど決然て違あらむとぞ思ふ。後人次く亦名よ
よ古書の出で其證を得よらむ時よ書加へてと。然れど
此段ある二柱神を天の萌騰るよ因て成坐して其を久
美凝して天日此御固と修固然成給する神等あること
著く。其はと皇産靈大神のまう生出給ひて事依し給牙
るよ因れるよと大地よ生給する伊邪那岐伊邪那美二
柱神よ御任まして大地を修固然し米給へるよ準へて
悟る法し。はと是を延て次段を思ふよ。固之底立神豊
斟亭神を根底固の垂下依よ因りて成坐て彼

圀を修固免成給_テ予_ル神等あること灼_ク凡て此より第
四段までの神等_ニ天_ノ圀根_ニ圀大地の三_ヲを作_リ免_ハむ_ル爲
ふ_ニ産成給_ヘる_ニ神等ある_ニを_ニ只_ニ大地を修固_ニ成さ_シめ給_ヘ
る_ニ事_ノ傳_ハ比_ニみ遣_ルる_ニ神世_ノ傳_ハ凡て此圀_ノ事_ニ専
と_テ語り_テ於_テ予_ニと_テ依_テ故_ルること_ニは_テ其_ノ修固_ニ免_ハ給_テ予_ル趣_ニ
上_ノも云_フる_ニを思_フ合_セて悟_ベし_ニは_テ其_ノ修固_ニ免_ハ給_テ予_ル趣_ニ
を_ニ大地を瓊_ノ戈_ニも_テ畫_キ疑_フそ_レ成_ル固_免の御柱_ト衝_キ立_テ給_ヘ
る_ニを想_フふ_ニ天_ノ日_ハ御圀_ヲを然_ル状_ニ造_リ固_免坐_シ殊_ニ小
嚴_ニ重_キ御柱_ヲを立て_テ無_窮小_ニ其所_ヲを移_ラズ_ニ運_テ旋_ル神_ノ機_ノ
樞_ノ軸_トと_テ爲_シ給_ヒら_ズむ_ニそ_レは_今現_ルふ_ニ仰_ギ視_ルと_テあ_ル大_ノ虚
空_ノ中央_ニ小_ノ懸_テて_テ其_ノ位_ニ虚_ニを變_ヘる_ニ事_ニあ_ル恒_ニ小_ノ居_レら
右_ニ旋_ル運_テ轉_ルる_ニを_ニそ_レ勢_ノ氣_ニ小_ノ掣_レて_テ大地_ヲを始_メ免_ハ謂_フ也
依_テ五行_ノの星_ニあ_ルとも_ニ其_ノ天_ノ日_ハ成_ル中央_ニ小_ノ置_テて_テ旋_ル動_ルこと_ニ人

も吾も見て知れ_ル如_クあ_ル依_テを_ニ天_ノ日_ハ樞_ノ軸_ノの御柱_ハ無_ナ
ら_ズむ_ニふ_ニを_ニ如此_クハ_ハ神_ノ機_ノ字_ヲ爲_シま_シじ_テ物_ノある_ニを_ニや_ス是_レ即_チ皇_ノ産
靈_ノ大神_ノの神_ノ靈_ノ子_ノ資_ノこと_ニれ_ルは_言ふ_ニも更_レれ_ル也_ニあ_ル第_ニ五
柱_トある_ニ処_ニ小_ノ注_ヲを_ニは_テ如此_ク天_ノ日_ハの御圀_ノの萌_テ騰_ル也_ニ大_ノ地
も_ニ合_セ考_フべ_シは_テ如此_ク天_ノ日_ハの御圀_ノの萌_テ騰_ル也_ニ大_ノ地
を_ニ成_ル法_ノき_ニ物_ハ離_レを_ニ下_ルる_ニを_ニ天_ノ地_ハ判_レし_ニ時_トは_云ふ
ゆ_ニら_ズ也_ニ謂_フ也_ニ天_ノ地_ノ開_ル闢_トと_テ此_ノ事_ニあり_ニ但_シ天_ノを漸_クく_ニ
ど_ニ然_ルも_ハ非_ズ必_ズ別_キて_テ離_レ下_ルゆ_ニら_ズむ_ニと_テ所_ニ思_フる_ニあり_ニ其
を_ニ第_ニ九_ノ段_ニ天_ノ地_ノ之_ニ相_ヲ去_リ未_ダと_テあ_ル相_ノ字_ヲを以_テも_ニ知
べ_シあ_ル次_ニく_ニ小_ノ言_ヲも_テ行_クを_ニ見_テ其_ノ判_レ也_ニ或_レ人_ノ問_フ天_ノ日
也_ハ質_ハ如何_カある_ニ物_ハ罷_レむ_ニ答_フ此_ヲ知_ラず_ラげ_ル事_ニあ
ま_ニと_テ強_クて_テ云_フは_ズ始_メ一_ノ物_ハ小_ノ含_マる_ニ時_ト也_ニ後_ニ小_ノ清

る神として。畧する物あり。如何と云ふ。彼紀本書も初
て末に至るも挙あり。若此神無くと云て。初子挙ざる
らば。末も挙まじ。死を末子挙て。初子挙ざる。依
ハ畧け。依
ハ非更也。未と一書。先。固。常立。神。おどを挙て。次子又曰
とて。天上ある神等を挙するも。天上れるを。別ある神
をせるれり。天上ある。先。よ。を。挙。げ。し。ち。ま。ば。別。と。云。依
て。後。子。も。挙。さ。る。を。別。ふ。せ。依。意。あり。ち。ま。ば。別。と。云。依
も。其。意。ふ。あ。て。天。上。ふ。成。坐。る。を。ば。別。れる。神。を。し。て。分。あ
依。母。れ。れ。也。ま。と。天。照。大。御。神。を。り。以。下。の。神。さ。ち。を。も。天
初。子。成。坐。て。彼。天。神。さ。ち。と。は。凡。て。等。し。の。ら。異。り。坐。故
了。其。差。を。多。て。別。天。神。を。申。け。り。と。も。思。え。る。れ。ど。依
不。上。の。意。子。決。む。べ。し。舊。く。ワ。ケ。と。訓。る。母。也。ろ。し。又。舊。事
紀。子。別。天。八。下。等。別。高。皇。産。靈。等。お。ぞ。云。る。別。此。の。別。を。其
意。相。似。し。る。如。く。お。れ。ど。も。別。某。神。と。申。け。り。御。名。古。書。子。例
あ。し。何。子。扱。て。書。る。お。り。彼。紀。を。真。書。お。ら。祢。む。信。み。難。し。
○今。云。上。件。の。師。説。ま。こ。と。子。然。る。言。れ。る。子。就。て。思。ふ。お。
紀。子。問。云。案。古。事。記。自。固。常。立。以。前。先。有。五。柱。神。而。此。紀

不載之。其説如何。公望私記曰。案古事記。此五神下。注云。此
五柱神者。別天神者也。然則古事記者。總別天地初分之後
化生之神也。故雖高天原所居之神。猶載之也。此書者。獨初
取地上之神。治地下者也。故不及天神在高天原者也。とあ
り。是師説と相同じ。然るも此文を引れざるは。見落され
し。お。り。此。餘。ふ。も。紀。子。師。の。引。る。べ。き。説。の。見。遺。さ。ま。と
る。の。多。か。也。天神を阿麻都迦微と訓べし。文武天皇紀の詔詞
ふ。天都神。聖武天皇紀。比大御歌。ふ。阿麻豆可未。大祓詞。子。
天津神。おど。を。以。て。證。と。云。は。し。猶。此。餘。ふ。も。多。し。然
を。世。り。天。神。地。祇。と。竝。ほ。云。や。き。の。天。神。を。の。み。ア。マ。ツ。カ
三。を。唱。子。て。其。餘。れ。を。む。ア。メ。ノ。カ。ミ。を。訓。を。非。あり。何。き
を。も。皆。ア。マ。ツ。カ。ミ。を。申。け。り。こ。と。子。て。ア。メ。ノ。カ。ミ。を。申。せ
る。お。と。を。無。し。右。ふ。出。せ。る。例。も。何。れ。も。地。祇。と。並。ほ。云。
依。如。子。は。非。る。ぞ。の。し。但。し。古。事。記。の。例。を。凡。て。阿。麻。都。と
云。不。ハ。津。字。を。加。子。て。書。れ。ど。も。此。を。古。々。り。常。子。天。神。を
書。お。れ。て。ア。マ。ツ。カ。ミ。と。唱。ふ。お。と。は。當。時。誰。ち。て。此。子
も。と。く。知。ま。せ。し。故。子。津。字。ハ。加。へ。ざ。る。お。也。

柱神の成坐りと云意也。但し此を古事記の文法子效
九葉此裡不言れし。○又有物云く。此段は別人此心得
難ふに於れむ。徴ふ委曲く記せまじと猶厭ば未し此も
言はし。其は未だ又字と下十字を除ては古事記の
在件おれむ事もぬきを。此十字の文は神代紀一書ふ天
地初判有物若葦牙生於空中。因此化神號天常立尊。次可
美葦牙産舅尊。又有物若浮膏生於空中。因此化神號天常
立尊とある。又字と下十字の傳を採て古事記ある傳と合
せ記せ也。彦舅等と云より以上も前段と同じ趣りて此
其を此傳ふ。天地初判をあるは天地と成はき物の混成

て漂在し。判る初を言るふて。有物若葦牙生於空
中とは其漂へ依物の中と也。狀葦牙若き物此生る
由にておれ天と成也。其物よ因て天常立尊。葦牙彦舅尊
此成坐るとの傳おれむ。古事記の旨も異あらぬ。但し天
を前も彦舅等々後みせるを異おれど。此はて下文も又
由も前段より師説を挙て断まるが如し。有物若浮膏生於空中とはかの混成りて漂在し物の中
と也。葦牙此如き物の生れるとは別ふ。はと浮膏此如ま
物の生る由れ也。其を何處り生れると云ふ。漂在し物
此根底も芽垂下り生て。此やぐて根因底因と成れ也。其
は此も因て成坐る神名を因常立と申ふて。天の底も成

坐る天常立と相對と依字以て悟る法し。然るを未しき
説をいひ破らむとして根、因底、因を云ふ。大地は胎中
在と云説を立て、くさく論へれども、悉強て穿出する
説どもよて論。但し文ふ生於空中とあるは、以て其を根
底下方ふ生れと云を異み思ふ人も有らむ。彼漂牙
る物を。大空の眞中より先生て、其中より葦牙の若し物ま
ち萌騰して。其上方ふ生じ。次し浮膏は如き物に垂下
て。其下方ふ生じて。上と下との異を、その側より空
中を見よ依意よあてて云と死を。上下ともふ空中ある
故。生於空中は語り傳ふ依物あり。然るを記傳よ此
葦牙の如くある物に因て成坐る神は、天常立、浮膏の如
くある物に因て成坐る神を、因常立と申は、以て天地

を分れとる事、我知べし。但し此は浮膏の如くある物
と葦牙の如くある物と、本より別し生くる趣も云、依を
少う傳、異あり。されど天と地との分れと依とを、此傳
よて殊に著明く聞えとて、云て、其浮膏の如くある物
を、漂牙の物の根底より生れりと云、傳あることを思ひ漏
はれしを、浮脂は譬は、古事記よて、彼一物の漂牙る状
を、譬へあるは、故にふと其方、抑神世は傳を、其世は神
よのみ心引れ給へるべし。抑神世は傳を、其世は神
等とて、次くふ語り、繼來れる説は、あまど。前段と此段
は、と次段の傳あどは、後より生坐る神等なり。於ても其始
を、知看まじ死事ふしあまは、皇産靈大神の御親は、産靈
ふ。鎔造し給ひ於。看行し坐る在は、儘を。次く語り繼
志、免給する傳ふぞ有べき。されど神世の傳説は、中よも
そ、米て、大切し考す、明きべき。あざあるを、さまで心を用
ひ、古傳を思ふ人の、鮮死は、甚も悲しき事あり。猶

開題記の初條まかく考定定也。又字と以下の傳を採
云るを見べし。其が中に若し浮膏と有る譬を採らざるは前
て。文成成せ也。段は云ふ如く形状ある物の譬ハ心得誤
むるまと有て既ふ我が師翁さら總て神世也。故實を温祿
予は思ひ誤られぬれぬ也。天地の初發。まと神の御德也。如何かあると云ふ事成知むと
去依不は。未だ天地世間の有る状を熟觀て。腹ハ一ハ神代
卷ハ出來る上りて。神典を拜み讀み。然して後に造化
の首を作し坐すとり三柱神の彼一物を生出給へる
由縁とり眼を扱け身ハ卑くも心をばは此大地をり姑く
放ちて。大虚空ハ飛し也。此大地を側とり見らむ意を
おとす。考ふ法を態を也。然らでは眞の旨を知得法を由

れし。抑己古の根底固の考ハ中庸の三大考第四固の
泉固云ふと見えて。黄泉と云ふ固あり然る其固の初發
の事を記すも書紀も見え傳説も々れぬ也。其固の初發
非ざれども彼萌騰る物ありて。天とれる不准予て思
ふは彼一物より垂下依物も有て黄泉とり成れる也
法を以て固を著せり。さて其垂降りて成れる事也。天の萌
上り多成れる也。何れ先何れ後ありぬ也。知法をら
言ふも字を見て猶淡く思ひ入て種の證を得とれぬ也。此
段あり説を始め次く考す予注を如し。何を中庸は
心字大空に飛し。天地泉を側とり見らむ人もぞ有る
おとす。徴を云ふへし説もも合せ見て思ひ知べし。
はて此生まる依物也。上方に萌騰れる物の漸く大く漸
漸に天固と成て其跡不殘まる。大地と成べき物の離れ
下に未だ堅まらば在し時也。まと此物の芽下に生れ依り

て。謂イハゆる下津シタツクニ國クニ豫美都國ヨミツクニ是レ也ナリ。此國レの成出レる説ハ有ル字ヲ其レ在リ第十一段の傳ハ云ヒ下津國トも豫美都國トも云ヒしハ第十二段ハ注を見レばハ如此ク始メとシ也ナリ。大地ト成レ法ハ死物ノ根底ハ成レる國ハ有ル故ナリ。根ハ國底ハ國トも根ハ之堅洲國トも云ヒ也ナリ。根ハ之堅洲國ト云ヒ不レ名ニ義ハ第三十段の傳ハいハちて此根底國トも後ハ大地トと斷離セて今ハ見レ放ル月ハ即チ去レ也ナリ。此國ハ大地ト斷離セる也ナリと見レ放ル月ハ即チ去レ也ナリ。第百三十八段の傳ハ注を見レべし。○因リ此レ而成坐トは彼ハ下方ハ芽生スる物ハ從テ成坐ル由リて其ハ葦牙ノ如ク萌騰レ依物ハ從テ葦牙ハ比古遲ト神ト天之底立神ハ成坐ルと同例ナリ也ナリ。豐斟淳神ト國之底立神ト二柱成坐セ也ナリ。反對シて此段の傳ハ前段ハ上下ハ心

い含ミめて思フひ辨ベし。○國之底立神ハ示ス云フ國之御名ハ義師云フ天之常立ハ推シて知レ法ハ也ナリ。常立ノ字ハ就テ解ス此御名字ハ之哉畧ナリ也ナリ。久爾ハ登リ許シ多知ト申シて非ズ也ナリ。書紀ハ之字ハ畧シ之例ハとして簡字ハ後世ハ古言ハをバ尋ヒむものも思フ書レれり然レ後ハ論ハを此ハ旨ト也ナリ。法ハ漫シれり文字ハと理ハの論ハを此ハ旨ト也ナリ。さハも誦シ色ハの上ハ下ハをハ子ハ也ナリ。をハ加シて又ハ此神ハ之御中ハ主ト神ト一ト也ナリ。此神ハの御事ハ例ハ此漢意ハ以テさハる也ナリ。説ハどもを言フ何ハ子ハみハ論ハも足ラ交ハ也ナリ。○豐斟淳神ハ雲野ハ神ト御名ハ義豐ハ物ハの多ハふハて足ヒ饒ハる意ハ也ナリ。稱辭ハ也ナリ。豊布都神ハ豊石窓神ハ豊玉毘古命ハ豊玉毘賣命ハまハ豊木入日子命ハ豊鉏入日子命ハの例

此如し。まゝ人、名あらでも。豊葦原、斟淳雲野ともよ。字を
中、固、豊、明、豊、米、上、豊、壽、あども云。斟、淳、雲、野、ともよ。字を
借字ふて。此を師説ふ。久毛は久年。久美久比許理あぢく
通ひて。物の集ツミに疑コトる意と。初ハジメて芽キザに意とを兼カヘする言コトよ
て。此、二、意、まゝおれおら相通へ。物集ツミに疑コトて。物の形
を成ナシも此あまおれ。野を怒イダシと訓ツケて。主ヌシに意あるは。凡ソレ
野字は古コに怒イダシと云イハれ。能ノと云イハれ。後ノチのあハとれ。師シの
云イハく。野角篠忍陵ノノノノあぢの能ノは古コにみミあハ怒イダシや云イハり。故ユ古
書シよ。此コノ等ノの板字イタジハ能ノ乃ハあハどをば用ヨウふるコト無クして。
みあハ奴ヌ怒イダシ農ノ濃ノあハどを用ヨウひコトり。農ノ濃ノれどをハ又マタ此コノ板字イタジあ
り。ノハ非ヒあハ凡ソレて右ミダの言コトどもを能ノと云イハれ。とをハ奈ナ良ラのハ
末ハおハれ。とより。うハおハれ。始ハジメまれり。や云イハれ。とをハ如ユし。は
と冠辭考刺竹條ツクシよ。籠コと。久美クミをハ通トふ由ユを。委ツケく云イハれ。と
也。開ヒラき見ミはし。信シり許母理も久麻も。集ツミに疑コトる意あ。雲クモ

も其意ふて。本モト同じ言コトあるは。はと角ツノ久年クニ芽メ久年クニ涙ナミダ久
年クニどの久年クニも。初ハジメて芽キザに意イて。疑コトる意イを帶オビとれ。む同
言コトあり。猶下ある角ツノ檝グシ神カミの下ノと考カ合アははし。但タし此コノ二ニ
土ツチり始ハジメて成坐ナリる義イミを解トクれコトる説セどもハあハど。其コノをハ実マコト
を此コノ神カミ根底ネソコ、固カタに始ハジメて芽メ生ナはハり。従ツて。成坐ナリるコトをハ思オモ
ひ得エられ。或ナての説セ。此コノ神カミを。彼カノ芽メ下ノる物モノ子コ従ツて成坐ナリるコト
あれ。む。凡ソレて採ツクらハれ。此コノ神カミを。彼カノ芽メ下ノる物モノ子コ従ツて成坐ナリるコト
まば。其固カタの下方シモに疑コト成ナる状サマを。負オシ坐ナる御名ミナあ。其コノは
上ウヘある角ツノ疑魂ウタマ命ノチと申イハれ。御名ミナふ似ニあハり。更マシも云イハれ。葦
牙アシ比ヒ古遲コヂ神カミと申イハれ。御名ミナも。意イ通トへ。此コノに依ヨて思オモふ。
天之底立神。固之底立神と對ムカひて。各オノ々オノ其固カタの底ソコに成坐ナリ
し。葦牙比古遲神。豊斟淳神也。も上下相對ウヘシモひて成坐ナリるコト

と疑ふき物あり。その成坐る座位の趣を玉此真。○豊組

野神師云久美ハ久毛久牟れづく通子也。○見野神。お

久美怒の久此省加也。記傳引れよるよる御

見當。○豊齧野神。久比を。加比久美あどく通子也。○豊固

主神。固久毛。未久牟と通へ也。主は尊免る稱あり。○

豊固野神。豊固主。小同じ。されむ上ある御名の。淳野とも

○葉木固野神。本籍よ。葉木固此云。播舉矩爾也。師云

葉木を富と約めて。含まる意あり。含まるを富くはると

も云。布富ぶも也。あざも云也。まよ波具久牟。波基久牟。○

淳經野。豊買神師云。淳を空中。小淳よる意。まよ後世の哥

云へむ。其意よ。經を含ま也。買は久比と通子也。○豊香節

野神。師云。布斯は比と切まれむ。香節ハ買と同じ。野を上

小同じ。此等の御名ども。彼此引。○此二柱神亦云く。上件

五柱神。あちは。謂也。依別天神。小坐せむ。御身を隠し給ひ

き。と断れるも。然こやれぬを。此の二柱神を。此国土に成

坐也として。身を隠し給ふと云。こや残如何とも。解法

き由あふ。師説よ。此を男女並て生坐る神と此。此を根底

固よ成坐せれば。此国土を。其御形を見奉るよとれき

故ふ。かく語也。傳子よるものあり。是就ても古事記の

ぐべし。等む。考し。まあ思ふよ。上件五柱神を。別天神也。称

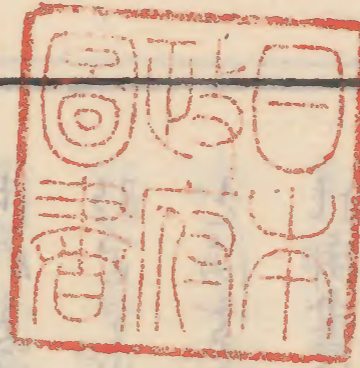
くれむ其は伊邪那伎命の豫美都圀ヨメツツに往坐依段ユイダンに伊邪
那美命の御言ミコトノコトよ與豫母都神相論ヨメツツノミコトノコトとある豫母都神ハ決
然て此此二ニちて此段コノセグに成坐ナリマシる二柱神の次第ツイデを思ふ。
神あるはカミちて此段コノセグに成坐ナリマシる二柱神の次第ツイデを思ふ。
根底圀ネソノを大地チノの下方シタノに芽下メカミして成ナリしうば豊斟淳神トヨシムツノカミは
先マに生坐ナリマシし圀ノ之底立ノソコタテ神ノカミを其物モノの漸シヅカく小垂下コタラシクりて成ナリす
極タラシれる處トコロに生坐ナリマシし故ユに前段マエノセグ葦牙アシノ此コノ如ノく萌騰モウテンれる物
よ因ユて生坐ナリマシる二柱神ニツツノカミの例ノ此コノ如ノく此コノも豊斟淳神トヨシムツノカミの次ツ
圀ノ之底立ノソコタテ神ノカミは依ヨる法ノきよ。然シカらばは別意コトあるコトに非ヒず。
お古コノとて語コトを傳ツへる儘ノに記ツせるれ依ヨる法ノきし。神代紀コノを
る傳ツども皆ツお此コノ次第ツイデに同ニれシるコト也ナリ。然シカれども実マコトハ
淳神トヨシムツノカミ次ツ圀ノ之底立ノソコタテ神ノカミとこそ有アるべし。されど今改イカむ法ノ
も非ヒず。本コノのまゝにシてあるコトあり。前段マエノセグ二柱神ニツツノカミの次第ツイデを

母ハハ上ノり引ヒく神代紀コノ一書ヒトツキよ天アメ常立トコノ神ノカミの次ツ
に葦牙アシノ彦舅ヒコノ神ノカミと反サカさまふ次第ツイデにあり。ちて此コノ二柱
神ノカミ豫美都圀ヨメツツに成坐ナリマシて彼圀コノを修理ツクリして給ツひ。遂ツに成ナリ竟マシす。大
地チノを断キちて月夜ツキヨ見ミ圀ノと爲ナ給ツへる事コトと知られど。
其コノハ前段マエノセグ二柱神ニツツノカミの天アメ御圀ミツツノカミをツまう修理ツクリ給ツ
へる趣オモヒに聞クゆるよ思オモひ合アせて辨ワカべし。或シて人問ヒトノ豫美都
圀ノの質シツはいのある物モノぞ答コタへ天御圀アメノミツツノカミに比ヒぶコトは重オモく濁ニれ
る大地チノに根底ネソに凝ツ成ナれるけふ也ナリ。汚物キタナの凝結ツクびて甚オモく
汚穢キタナき質シツとまそ所思オモヒ依ヨる其コノを伊邪那伎命ヨメツツノカミ此コノ伊邪醜目ヨメツツノカミ
穢圀キタナと詔ミコトノコトへるを以ツて知られど。精シヅカき物モノを月夜ツキヨ見ミる水ミヅの
依ヨる漢籍カンシヤクよ月ツキハ水ミヅ精シヅカと云イふと有アるをふと然シカる也ナリ。
思オモひよ誤アり。れを第十八段ジウハチノセグ第十九段ジウクノセグの傳ツよ
注ツふを見ミ抑ソクさる汚穢キタナ圀ノも大地チノに下方シタノに凝ツ成ナて。此コノ
て知チべし。

二柱神。それふ從て成坐タナゆぐ。直ふ其を造ツク成あるへカ趣
ふ聞キもるを總スベて世間ヨリナカに在る物。人の生アレ出る理リを更スふ也。
穀物本草の類ルまらずも。其根を穢物キもて養ヤシひて。清キヨく善ヲ志
死物シ此成出る趣サシふ思ヒ合せ。まと久クしく大地オホツチふ著ツキて在リ
ぐ。皇美麻命スメノミコ此天降アメリ坐して後ノチに。斷離キレハナれて。月夜ツクヨ見ミと現アラは
ま。然して国土クニ万物マンブツ茂養シふ趣サシふも思ヒ寄ヨスるよ。其久クしく
大地オホツチふ附ツキて在リしとやは。大地オホツチとり垂タリ下リり。はと自然オノカラふ大
地オホツチを養ヤシへる。幽フカき理リ此有アルゆりや。と想像オモヒヤラゆりを後人ノチノヒトあ
ふ考カウふはし。ふは月ツキ豫美ヨシ圀ノの事コトを。下シ此段ノくも云ヒ委
えスるル処ヲ注ツくも第百三十八段ノ此物ノの始ハジ免ヘて空カラ見
ふミを見るルべし。

○門人岩崎長世。前島正弼。北原信質等いふ。吾師翁の著
られぬハ依書籍ヨ百部ヒャクブ可カ也。其ノ中ニふハ三十餘部ニをハ既ハくハ上木
形ノ也ト。世ニふハ弘ホまれぬハ抄ノ。其本編ノとル此レ傳ハしも。此ハ不
とはずハ寫本ノあらずハ也ト。バ。容易コヒタビくハ乞賜コヒタビ難ガ也ト。然ルるハ何
れ御書ノにも。御ノさをし言ハれ終ノ免ヘるハ。古史傳ノ小就ノて見ル
ゆり。古史ノ此何段ノの傳ノ字見ルるハ也ト。誰レしノ人ノもやむ免ヘるハ。身ノも志
すて。野中ノの花ノを霞ノふはどはし。月ノ末ノ於嶺ノに輕引雲ノの。い
と飽アるハ口ノ残レしくも。誰レしノ人ノもやむ免ヘるハ。身ノも志
免ヘしてハ慷慨ノさをいはすハ。其ノ卷ノをはしハ於方ノよに乞賜コヒタビて。
神ノふハ皇ノ忠誠ノしハからむ人ノ字ノ前ノ免ヘて。板ノ彫ラせる。

世小弘くせむやと。杞のガヅち量定免て。やがて御許小
孫ぎはをち。茂情し鴨欣し加も。諾と宣ハせむ。それ清
書を。去死く小ぬむ賜せぬ。依まふま。先此はじ免の卷
をば。今村、信敬して。かく櫻木よゑらせむ。あり。信敬
を。信濃、国伊那、郡麻績、里人。



○門入... 伊那郡麻績里人... 信濃國伊那郡麻績里人... 櫻木よゑ... 信敬... 先此はじ免の卷... 書を。去死く小ぬむ賜せぬ。依まふま。先此はじ免の卷... 諾と宣ハせむ。それ清... 鴨欣し加も。諾と宣ハせむ。それ清... 茂情し鴨欣し加も。諾と宣ハせむ。それ清... 孫ぎはをち。茂情し鴨欣し加も。諾と宣ハせむ。それ清... 世小弘くせむやと。杞のガヅち量定免て。やがて御許小

